

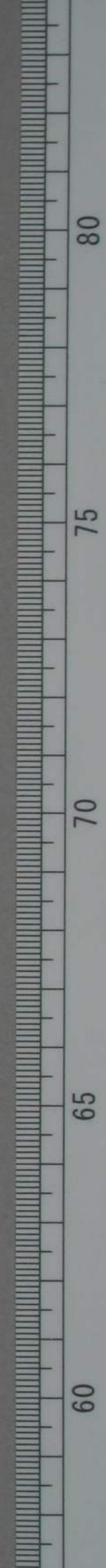
通俗文學全書

第二編

大和田建樹著

新體詩學全

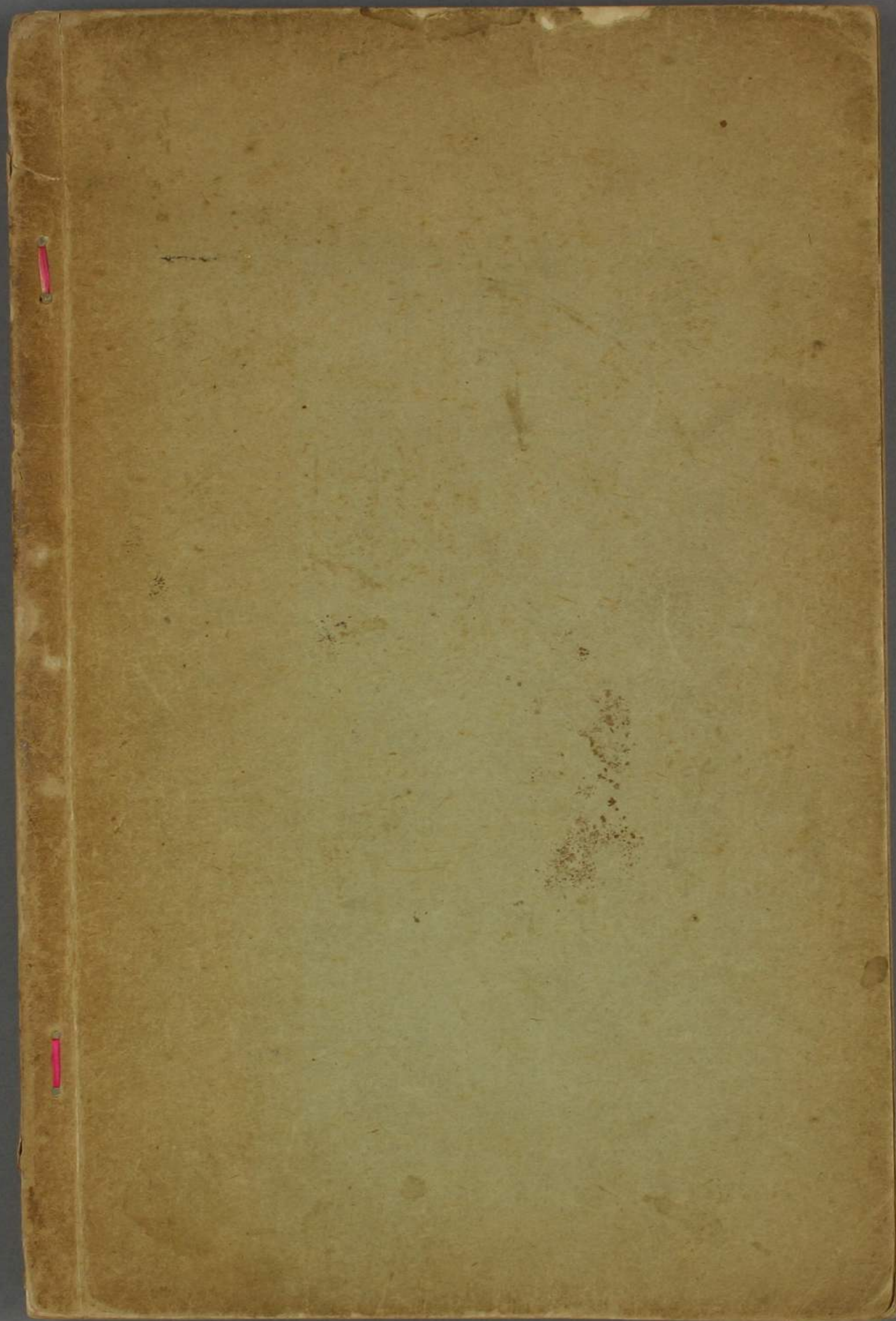
東京 博文館藏版













大和田建樹著

新體詩學全

東京博文館藏版



大和田建樹著

新體詩學全

東京博文館藏版



東京新文館刊

新體詩學

大塚武吉著

新體詩學目次

(一) 開題	一
(二) 歴史	六
(三) 種類	三十八
(四) 句格	四十
(五) 段格	四十八
(六) 詞の撰方	五十六
(七) 意匠の工夫	六十六
(八) 装詞の種類	八十
(九) 文法の變格	九十一
(十) 題の附方	九十七
(十一) 書式	百三



(十二) 讀法……………百六丁

(十三) 結論……………百九丁

(十四) 參考室……………百十丁

(十五) 新議案……………百六十六丁

# 新體詩學

大和田建樹 著

## (一) 開題

新體詩なる語は。今や誰しも口に熟し耳に慣れたる普通名詞となりて。明治辭書中に増加を與へし語數の一つたるは。疑ふべからず。其は、はじめはいつにて。誰が之を用ひ初めたるぞといふに。去んぬる明治十五年の頃。外山、山。矢田部尚今。井上巽軒の三先達が。西詩の翻譯と新作の長篇とを合著して新體詩抄と名づけ。丸善をして出版せしめられしに起因せるは。是また明かふる事實なり。其凡例に曰く。



均シク是レ志ヲ言フナリ。而シテ支那ニテハ之ヲ詩ト云ヒ。本邦ニテハ之ヲ歌ト云ヒ。未ダ歌ト詩トヲ總稱スルノ名アルヲ聞カズ。此書ニ載スル所ハ。詩ニアラズ歌ニアラズ。而シテ之ヲ詩ト云フハ。泰西ノ「ポエトリー」ト云フ語。即チ歌ト詩トヲ總稱スルノ名ニ當ツルノミ。古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ。

又曰く。

和歌ノ長キ者ハ其體或ハ五七。或ハ七五ナリ。而シテ此書ニ載スル所モ亦七五ナリ。七五ハ七五ト雖モ。古ノ法則ニ拘ハル者ニアラズ。且ツ夫レ此外種々ノ新體ヲ求メント欲ス。故ニ之ヲ新體ト稱スルナリ。

是ぞ新體詩の文字を説明せるものにて。爾來新體詩は其目的に於て流行しつゝ、進歩しつゝ有るを見る。先達の開口唱道まことに厚謝すべきの甚しきものなり。

然れども。世にはその到る先をも確かめずして。人の群集の跡おひてぞろぞろと付きゆくもの多きが常なれば。何の爲めに新體詩を作り。如何なる方法にて之を作るべきかも知らずして。みだりに之を綴り之を翫びて。唯時好に後れざらん事をのみ勉むる人々も無しと限られず。新體詩の流行進歩もごより希望すべき事なれども。一歩を誤らば。チヨボクレ節と爲り端唄調と爲り。野卑猥褻見るにも聞くにも堪へざるものと爲つて止まんとするは。歎かはしく厭ふべき次第ならずや。

何故に斯かる誤解を來すべきぞといふに。是れ併しながら新體詩の事を學ぶべき書ふきが爲めのみ。余は新體の二字を以て文學上の光明と信ずると同時に。陣腐の二字をば更に文學上の暗黒と呼ぶ者なれば。こゝに新體詩學を著はして。飽くまでも明治文學の區域を横め。以て自由自在の新鮮空氣を同學諸君に呼吸せしめんと期するなり。



開題の終に臨んで。必ず讀者諸君に告げ置かねばならぬ事あり。此書名づけて新體詩學と曰ふ諸君既に知れり。然るに載する處の規則。擧ぐる處の作例。多くは過去のものに屬して新體の實を見ざるは何ぞや。是れ或は諸君の譏りと疑ひを免かれ難き處ふるべければ。請ふ詳かに之を説かん。

世人常に曰ふ。我は明治社會に生活して明治社會の言語を用ふ。何ぞ古人の死文を學びて迂遠の事に暇を費やさんやと。いかにも一應は尤の論に似たれども。實は思はざるの甚しきのみ。よしや明治社會の言語を自由自在に使ふにもせよ。最初の未熟ふりし時。誰の言語をも模倣せしめて發達せし理は有らざるべし。あらはにこそ分られ。父の物言ひを聞き覺え師匠の音聲を習ひ取りふとしつゝ。漸々に口上會話演説なども出来るやうに發達し來りしや疑なし。文章とても同一事にて。始より手本ふしには修業は出來まじ。其手本とするは明治の文章もとより適せりと雖も。今人の書きたるものには謂はゆる玉石混合

しつゝ。之に加ふるに愛憎の私情を以てし。容易に公平無私の心より可否を判斷するはむつかしき事なり。之に反して古人の文章は。後世に傳はるもの。多くは優等にて人口に膾炙するもの。みあるが上に。既に世を去りて明治の我々と利害をも毀譽をも競争せざる人々ふれば。愛憎の公私のといふ事。毛頭あるべき筈もなく。全く優れるを優れるとして見るが故に。模範とすべきは古文に在る事勿論なるべし。唯その作者の時代をも辨へずして。古文とし言へば一圖に高く。今文とし言へば只管卑しく偏信するは。笑ふべきの甚しきこと。今更言ふまでも無きは誰も知る處ならん。

新體詩を學ぶも又この理あり。今や雜誌に新聞に編輯に著述に。到るところ新體詩の聲を聞くが如くなれども。其中に就きて。規則を見出だし模範を得るものありやと問はれふば。先づむつかしき多數ふりと答へて止まん外なし。されば此くの如きものを標準として規則を示し。之を模範として文例を集めん



は。讀者諸君をして危険に陥らしむるのみならず。余が希望して止まざる理想中の新體詩に遠ざかりしめん事。いよく甚しきを加ふるを見んのみ。諸君も知らん。現在の謂はゆる古歌ふるものは。過去の謂はゆる新體詩なりし事を。果して然らば古歌の沿革と其作例とを研究し。既往の盛衰得失の跡を鑑みて以て。將來の勸戒に備へんこそ。余が理想中新體詩の擴張進歩を企圖する順路ふる事をも。併せて諸君の會得するあらん。

(二) 新體詩の歴史

新體詩の名は明治十五年の頃に起りし事。すでにいへり。古代の詩歌は其時其時の新體詩ありし事。これまた前にいへり。されば新體詩ふる名は新らしけれども。其實は古代よりありて時世々々の沿革を経來りしものなる事も。明か

るべし。今こゝに其起原より始めて簡單に其大要を語らんとするあり。

紀貫之が古今集の序に。「千早振る神代には。歌の文字も定まらず。云々。素盞鳴尊よりぞ三十文字あまり一文字はよみける」といへるは。後世の如く五言七言の句法に必ず合はさねばならぬといふ類の。人造規則の無かりし時代を指したるなり。

此時代は紀元前に始まりて奈良の朝の頃までも續きたり。其一二例を示せば。神武天皇兄彥を撃たせ給ひし時の御製に曰く。

- うだの言<sup>三</sup>……………(宇陀にて大和の地名)
- なひきに言<sup>四</sup>……………(高城にの意にて小高き處を云ふ)
- しぎわふける言<sup>六</sup>……………(鳴を取るごとてわふを張るを云ふ)
- わがまつや言<sup>五</sup>……………(我待つところの意)
- しぎはさやらず言<sup>七</sup>……………(鳴は障り懼らずあり)



いすくはし<sup>五</sup>……………(くぢらの枕詞)  
くぢらさやる<sup>六</sup>……………(鯨かゝれりの意)  
こふみが<sup>四</sup>……………(前妻の事)  
ふこはさば<sup>五</sup>……………(魚乞はゝふり)  
たちそばのみの<sup>七</sup>……………(木の名ふるべし次の句の序詞)  
なけくを<sup>四</sup>……………(長き肉をの意)  
こさしひゑね<sup>六</sup>……………(許多の肉をへぎて與へよの意)  
うはふりが<sup>五</sup>……………(後妻の古言)  
なこはさば<sup>五</sup>……………(前に出づ)  
いちさかきみの<sup>七</sup>……………(これも木の名にて次の句の序詞)  
おほけくを<sup>五</sup>……………(大きふる肉をの意)  
こさだひゑね<sup>六</sup>……………(前のこさしに同じ)

日本武尊の伊勢の國にての御歌に曰く。

えゝしやこしや<sup>七</sup>……………(惡み詈る詞)  
あゝしやこしや<sup>七</sup>……………(嘲り笑ふ詞)  
をばりに<sup>四</sup>……………(尾張にあり)  
たゞにむかへる<sup>七</sup>……………(直に向へるなり)  
をつのさきふる<sup>七</sup>……………(尾津の崎にて伊勢の地名)  
ひとつまつあせを<sup>八</sup>……………(一つ松吾兄よの意)  
ひとつまつ<sup>五</sup>……………  
ひとにありせば<sup>七</sup>……………(人に在りせばあり)  
きぬきせましを<sup>七</sup>……………(衣着せましをふり)  
たちはけましを<sup>七</sup>……………(太刀佩かせましをふり)  
ひとつまつあせを



右の時代の間より。おのづから人々の好む句法定まり來りて。藤原奈良の頃に至りては。五言七言。五言七言と連ねゆく調べが長歌の定格と爲りたる如し。歌聖といはれし柿本人麿(藤原時代)山部赤人(奈良時代)などは。常に之を用ひたり。

萬葉集一の卷に。吉野宮に行幸のありし時。人麿のよめる歌に曰く。

やすみし <small>五言(枕詞)</small>	わが。おほき。みの <small>七言(我大君の)</small>
きこし <small>五言(聞き召す)</small>	あ。め。の。した。に <small>六言(天下に)</small>
くにはし <small>五言(國は)</small>	きは。に。あれ。ども <small>七言(多に有れども)</small>
やまかは <small>五言(山川の)</small>	きよ。さ。か。ふ。ち。と <small>七言(清き河内の地として)</small>
みこ <small>五言(枕詞)</small>	よし。ぬ。の。く。に <small>七言(吉野の國の)</small>
はち <small>五言(花散)</small>	あ。き。づ。の。ぬ。べ <small>七言(蜻蛉野邊に)</small>
みやば <small>五言(宮柱)</small>	ふ。と。し。き。ま。せ。ば <small>七言(太敷座せば)</small>

も <small>五言(枕詞)</small>	おほ。み。や。び。と <small>七言(大宮人は)</small>
ふね <small>五言(舟並べて)</small>	あ。さ。か。は。わ。た。り <small>七言(朝川渡)</small>
ふな <small>五言(舟競)</small>	あ。ふ。か。は。わ。た。る <small>七言(夕川渡)</small>
この <small>五言(此川の如く)</small>	た。ち。る。こ。と。ふ。く <small>七言(絶事無く)</small>
この <small>五言(此山の如く)</small>	い。や。た。か。ら。し <small>七言(彌高からし)</small>
いは <small>五言(枕詞)</small>	た。ぎ。の。み。や。こ <small>七言(瀧の皇居は)</small>
みれ <small>五言(枕詞)</small>	み。れ。ど。あ。か。ね。か <small>八言(見れど飽かぬ哉)</small>

同書三の卷に。葛飾の真間の手兒名が墓を過ぎて赤人のよめる歌に曰く。

いに <small>五言(古に)</small>	あ。り。け。む。ひ。と <small>七言(在りけん人の)</small>
しづ <small>五言(倭文機)</small>	お。び。と。き。か。へ <small>七言(帯解替)</small>
ふせ <small>五言(伏屋立)</small>	つ。ま。ど。ひ。し。け。む <small>七言(妻問しけん)</small>
かつ <small>五言(葛飾)</small>	ま。の。て。こ。ふ <small>七言(真間手兒名)</small>



おくつきは五言(奥墓は)  
 まきのはや五言(真木葉や)  
 まつがねや五言(松根や)  
 ここのみも五言(言のみも)  
 わすらえなく七言(忘れざるに)

こゝとはきけ七言(此處とは聞けど)  
 しげりたるらむ七言(茂りたるらん)  
 とほくひさしき七言(遠く久しき)  
 なのみもわれは七言(名のみも我は)

これらの句法は、古體長歌の格として明治の今日までも。保守的歌人の間に専ら行はるゝものなるを知るべし。但し五言の句を或は四言にも爲し。七言の句を或は六言にも爲して用ひ。其他臨時適宜に長短句を交へ用ふるは。例外としてゆるざるゝ習慣ふるは。猶かの句法未定前の餘習を受けつぎ。更に幾分か自由の氣を含みて。將來の擴張時期を待ちつゝあるものなるが如し。今これを五七調の長歌時代と稱へて。前の句法未定の長歌時代と區別するあり。古文學者は常に此時代を以て長歌正格の時代と爲し。後世に至るまゝに次第々々に亂

れゆくものふりと論ずれども。是は其標準を古にのみ取りて今を忘れたるものふれば。輕々しく同意は表しがたし。唯これを參考室に備へおきて。飽くまでも先祖の遺業。子孫我々の模範として研究し。時として學べども之にのみ拘はらずして。ひたすら自由自在の區域を擴めんことを忘るべからざるなり。次に音樂に合はせて謠ふ歌曲は。謂はゆる神樂歌催馬樂風俗の類にて。桓武天皇遷都の後。さかんに行はれしを見るなり。抑も音樂に合はせて謠ふ歌曲として。上古には別種類あるに非ずして。我作りし歌を我適宜の音樂に合はせ。我適宜の節にて朗吟せしに止まれども。今や朝廷の御儀式に用ひらるゝ音樂は其曲譜を定め。歌詞をも精選する事となりたれば。謠ふ歌は節附に都合のよきやうに長短適宜につゞけゆく事となりて終に一種の歌曲體を成し。此に於て詠歌と歌曲と二つに分れしなり。而して詠歌の方はおこそかに句法を守り雅言を用ふれども。歌曲の方は句法に拘はらずして俗語を交へ字音を混じなど。



自由自在なりしかば。取りも直さず明治社會に新體詩の流行を見る如き有様を爲したり。其一二をあぐれば。催馬樂に曰く。

夏引の。白糸。七はかりあり。袂衣に。織りても着せん。ましめはなれよ。

(われは夏引のよき白糸を。衣七反分ほど織るだけ持てり。それにて御身が衣を織りて着すべければ。御身本妻に離れ給へよとなり。女より男にいひかけたるなり。)

かたくなに。ものいふ女かな。まし麻ぎぬも。わが妻の如く。袂よく。清く肩よく。こくび和らかに。縫ひ着せめかも。

(自分勝手の事いふ女かふ。さりごとて汝は。麻衣をも我本妻の如く手際よく縫ひて着する事の出来得べしやとなり。男の答へたるふり。)

風俗に曰く。

荒田に生ふる。富草の花。手に摘みれて。宮へ參らむ。ふかつたえ。

(末の句は詳ならず)

これらの流行すると同時に。長歌も句法の沿革を來し。上古に五七調ふりしもの。今は七五調に續きゆく勢と爲れり。其例は古今集ふる壬生忠岑の歌に。

吳竹の五言

世々のふること七言

伊香保の沼の

おもふこと、るを

あはれむかしへ

人磨こそは

身は下ながら

天つそらまで

末の世までの

なかりせば五言

いかにして

述べへまし

ありきてふ

うれしけれ

ここの葉を

きこえあげ

跡となし



いまも仰せの  
塵に続けとや  
つもれる言を  
これを思へば  
薬けがせる  
雲に映えけん  
千々のふきけも  
一つこゝろぞ  
かくはあれども  
近きまもりの  
たれかは秋の  
あざむき出で、

くだれるは  
塵の身に  
とほるらん  
いにしへも  
けだものゝ  
こゝちして  
おもほえず  
ほこらしき  
照るひかり  
身ありしを  
来るかたに  
御垣より

外のへ守る身の  
をさくしくも  
九かさねの  
あらしの風も  
今は野山に  
春はかすみ  
夏はうつせみ  
秋はしぐれに  
冬は霜にぞ  
かゝるわびしき  
つもれる年を  
五つの六つに

御垣守  
おもほえず  
中にては  
聞かざりき  
ちかければ  
たふびかれ  
鳴き暮らし  
袖を貸し  
せめらるゝ  
身ふがらに  
しるせれば  
ふりにけり



これに添はれる  
 老いの數さへ  
 身はいやしくて  
 ここの苦しき  
 長柄の橋の  
 難波のうらに  
 波のしわにや  
 さすがに命  
 越の國なる  
 かしらは白く  
 音羽の瀧の  
 老いず死ふすの

わたくしの  
 やよければ  
 年なかき  
 かくしつゝ  
 ながらへて  
 立つふみの  
 雨ほれん  
 をしければ  
 しら山の  
 ありぬとも  
 おごに聞く  
 くすりもが

君が八千代を

わかえつゝ見ん七言

とあるを讀まば。全篇の句法は猶五言に始まりて七言七言に終はる事の變はらざると共に。句切々々の七五。七五。と續く勢に變はりやきたるを見るべし。而して語勢のやうく柔弱に冗長になりたる如きをも感ずべきあり。後世の謡曲淨瑠璃ふど何れも七五調ふるは。起原をこゝに發したること。讀者諸君も争はずして了解せらるゝ處ならん。

藤原氏衰へて平氏源氏相ついで政權を握る世の中とありし頃より。今様といふ歌曲さかんに行はれたり。是は中古の初期に弘法大師の作れりと言ひ傳ふる。一いろは一歌の句法に依りて。七五七五。七五七五。と八句に綴りふしたるものあり。平家物語に祇王が歌ひしを載せて曰く。

君を始めて七言

見るときは五言



千代も經ぬべし七言

おまへの池ふる七言

つるこそ群れぬて七言

又佛御前の歌ひしに曰く。

佛もむかしは

我等もつひには

いづれも佛性

隔つるのみこそ

又同書ふる後徳大寺實定が作に曰く。

ふるき都を

淺茅が原こそ

月のひかりは

姫こまつ五言

龜をか五言

あそぶめ五言

凡夫なり

ほとけなり

具せる身を

かふしけれ

來て見れば

荒れにける

隈ふくて

秋風のみぞ

身にはしむ

以て其一斑を知るに足らん。抑も之を今様と名づけしは。當世風の歌といふ意味にて。かの五七もしくは五に始まり七七に終る七五調の古體と區別して呼びたる稱ふれば。全く新體詩と異語同意の詞たりしなり。さらば何故に句數に制限ありて。それより長くは綴らざりしぞといふに。中古以來貴族社會に行はれたる唐樂の中に。越天樂といふ曲ありて。其譜と今様の句數とが一分一厘も違はずして。うまく合奏せらるゝは。もと越天樂の譜に合はせて作り始めしものか。又は偶然に一致せしものかは知られど。とにかく此越天樂が今様の制限を定めしに與かつて力ありしは。疑ふべからざる事實ならん。もしかの越天樂の曲ありて而して後に。之に合はせんとて今様の歌出で來しものなりとせば。明治社會に流行する。西洋の曲ありて我國の歌出で來るものと同一關係にて。新體詩の區域を擴むるに音樂の力を借りたる好例は。古代にありと謂ふべ



きふり。是より進みて七五の句法を爲すものいよゝ増加し。遂に五言に起り七言に終らずして七言に起り五言に終るものを。今様體と總稱するにも至りしなり。かの七五調の長歌は間接に今様體の起原を爲し。この七五調の今様は直接に今様體の系圖をほゞめたるものと謂ふべく。而して遂に今日の新體詩を誘導しつゝ有りしものゝ如し。

鎌倉幕府の時代に至り。平家物語義經記曾我物語などの文章出で、半は散文の如く半は歌曲の如く。謂はゆる語るに口調よく聞くに面白きを主としたり。此文章の系統を承けて。後の歌曲は生まれたるなれば。時としては散文に近き文句を交へて。必ずしも七五調のみに限らざりしは。かの催馬樂今様の如く。終始謠ひつゝ音楽に合奏するものに非ずして。文章を朗讀するといふ精神これが先とあり。音律と拍子とは之を助くるまでの器械として用ひられしが故ふるべし。是また新體詩の針路を指揮しつゝ。自由自在の翼を得せしむべき一大

勢力あるものふりけり。

其あらはれて歌曲の形を成したるものを宴曲と云ふ。酒宴の席ふどにて謠ふ曲といふ意味にて。鎌倉の末足利の初ごろに行はれたり。「春」といふ曲に曰く。

霞たふびく。雲井より。

明くる氣色も。のどかにて。

霞むとすれど。淡雪の。

岩間の氷。とけやらす。

ふこそその關の。あづまぢ。

.....そよや。

櫻の花に。にほはせて。

百千馬。木づたへば。

.....

春立ちけりふ。天の戸の。

驚きそひ。はるの風。

下草はなほ。結ほれて。

いかでか春の。越えつらん。

.....

あらまほしきは。梅が香を。

柳が枝に。さかせてしがな。

己が羽風にも。亂れぬべき。

.....ものをな。



誰におほせてか。……

やへ山吹。……

汀にふびく。池の面。

しひてや。手折らまし。

三月の永き。春日も。

啼く音も絶えせ。ざるらん。

紫ふかき。藤波。

とり／＼にぞや。覺ゆる。

折らしてや。かざりましやふ。

猶あかふくに。暮らしつ。

是は大かた今様を長く續けたるが如き。七五調を本としたるものなれど。長短句を随意に用ひたるは。……點を打ちたる處の缺句。または其他語數の過不足せる句に就きて見るを得べし。又「月」の曲に曰く。

更闌け夜閑かにして。

明月峽の。あかつき。

千里に月。明かふり。

宮漏まさきに。長ければ。

清明なる。月の夜。

庾公が樓に。登れば。

殘月まごに。願ひて。

打つや砧の。萬聲。

千度寐覺の。床の上に。

片敷く袖にや。おきそはん。

秋琴綾く。調へて。

索々たる。絃の響き。

ふけては寒き。霜夜の。

瀧の水。氷むせんで。

月の出汐や。御津の濱。

波間にうかぶ。白妙の。

月は明石の。浦のすまひ。

問はず語りの。夢もげに。

いざ見にちかん。更科や。

廣澤住の江。難波がた。

拂ひもあへぬ。露霜を。

月さえて。風秋ふり。

潭月に望む。のみふらし。

松の嵐も。かよひ來て。

月を候山に。送るなり。

流るゝ事をや。得ざるらん。

松の下枝を。洗ふ波の。

月や砂を。照らすらん。

真木の戸口の。月影。

忘れぬ節ごや。ふりねらん。

婁捨山。清見が關。

蘆間にやどる。夜半の月。



仰げば清き。久方の。

雲の梯に。すみわたる。

月華門の。夕月夜。

うつろふ萩が。花すり。

玉がと見ある。月影。

伏待の月……………

月のみやこは。九重の。

露臺の月の。有明。

秋の宮人の。袖の上に。

露もさふがら。色々の。

いざよひに。弓張。

おぼろに霞む。三日月。

右の曲に至りては。漢文風の語氣も多く交り來りて。長短句の用ひ方も前例よりは遙かに隨意の度の増したるを見る。是等の歌曲が今一步を進めて。舞の手と伴ふひたるを曲舞くまかといふ。足利の初期もつばら行はれしものにて。謡曲の起原をふしたるは是なり。

されば其成立には幼時より進みて成人に入りたる沿革の順序あれど。文學上の沿革よりいへば。曲舞は謡曲の一部分。謡曲は曲舞に前後を加へて大成せしも

のに外ならず。故に今こゝには別々に例をあげずして。謡曲中の歌として新體詩として味はるべきものを引き。之を宴曲の系統に繼がしめんとす。

抑も謡曲は能樂と共に足利時代に起り足利時代に成り足利時代に行はれたる歌曲あり。而して徳川時代を透して衰へず。明治社會の光にあひて更に振はんとするは諸君も知る處ならん。其此くの如き大勢力を得たるは何ぞや。能樂を美術上に音樂上に論ずる事は。今こゝに要ふければ姑く措くとして。謡曲を文學上に見るのみにても。人を感動せしむるに足るものあればあるべし。中にも其全曲中の一小部を抜き出だし。世に「小うたひ」と名づけて酒席の一興に備ふる短篇のものには。十分新體詩として吟誦すべきもの多し。種類にも富みたれば。他の例よりはやゝ細かに之をあぐる事の必用あるべきを信するなり。安宅に曰く。

然るに義經。弓馬の家に生まれ來て。命を頼朝に奉り。屍を西海の波に沈め。



山野海岸に。起き臥し明かす武士の。鎧の袖枕。かたしく隙も波の上。ある時  
 は舟に浮び。風波に身を任せ。ある時は山脊の。馬蹄も見えぬ雪の内に。海少  
 し有る夕波の。立ちくる音や須磨明石の。とかく三年の程もふく。敵を亡ぼ  
 し靡く世の。其忠勤もいたづらに。ありはつる此身の。そも何といへる因果  
 ぞや。げにや思ふ事。叶はねばこそ浮世ふれど。知れどもさすかなほ。思ひか  
 へせば梓弓の。すくふる人は。苦しみて。讒臣はいやましに世にありて。遠遠  
 東南の雲を起し。西北の雪霜に。せめられうもるうき身を。ことわり給ふべ  
 きふるに。たゞ世には。神も佛もましまさぬかや。恨めしのうき世や。あらう  
 らめしのうき世や。

是は義經が末路の述懐を寫せるふり。一讀英雄の勝を斷たしむる感あるべし。

井筒に曰く。

名ばかりは。在原寺の跡舊りて。松は老いたる塚の草。これこそそれふ亡き  
 跡の。一村すゝきの穂に出づるは。いつの名残ふるらん。草茫茫として。露  
 しんじくと古塚の。まことふるかな古の。跡ふつかしきけしきかふ。

古寺のありさま自ら思ひやられて身にしむ心地すべし。

鶉飼に曰く。

しめる松明ふり立て。藤の衣の玉だすき。鶉籠を開き取り出だし。鳥つ巢  
 おろし荒鶉ども。此河波にはつと放せば。面白の有様や。底にも見ゆる篝火  
 に。驚く魚を追ひまはし。かつきあげすくひあげ。ひまふく魚をくふ時は。罪  
 も報いも後の世も。忘れはて。面白や。漲る水の淀ならば。生簀の鯉やのほ  
 らん。玉島川にあらねども。小鮎さはしるせらぎに。かだみて魚はよもた  
 めじ。不思議やな篝火の。燃えても影の暗くふるは。思ひ出でたり。月にな  
 りぬるかなしきよ。



忽に興至り忽に興盡く。變化あるを味ふべし。  
百萬に曰く。

(前略)奈良の都を立ち出で、。歸り三笠山。佐保の川を打ちわたりて。山城に井手の里。玉水は名のみして。影うつす面かけ。あさましき姿なりけり。かくて月日を送る身の。羊の歩み隙の駒。足に任せて行く程に。都の西と聞えつる。嵯峨野の寺に参りつ。四方のけしきを詠むれば。花の浮木の龜山や。雲に流るゝ大井川。まことにうき世のさびふれや。盛すぎゆく山櫻。嵐の風松の尾。小倉の里の夕霞。立ちこそつゞけ小忌の袖。かざしぞ多き花衣。貴賤群集する。此寺の法ぞ尊き。

行方うしなひたる愛兒を尋ねて。奈良より嵯峨まで迷ひ來たる慈母の情を寫すと共に。其経過せし道すがらの地名を畫がき出だせるは妙筆ならずや。其他極めて短きものにては。

花に馴れこし野の宮の。秋より後はいかふらん。

また。

釣瓶の水に影おちて。袂を月やのぼるらん。

ふごの如きものも。新體詩の参考室中に味ひのこすべきに非ざるふり。

此謠曲の系圖を繼ぎて。雅言を俗語に替へ雅趣を俗意に移しつゝ。猶更に其仕組を増大にし。或は通俗を主とせしものは。慶長の頃より徳川時代に至りて發達大成せし淨瑠璃長唄の類ふり。

又遙かに今様の系統より出で、。之に加ふるに謠曲の分子を以てし。遂に長唄と相合したるものは琴唄ふり。其今様體なるものは。露組に曰く。

其一

露といふも。草の名。

富貴自在。徳ありて。

茗荷といふも。草の名。

冥加あらせ。給へや。



其二

春の花の金玉。  
柳花苑のうぐひすは。

其三

月の前のしらべは。  
くもぬの雁がね。

其四

長生殿のうちには。  
不老門のまへには。

其五

弘徽殿のほそごのに。  
朧月夜の内侍のかみ。

和風樂に。柳花苑。  
同じ曲を。さへづる。

夜寒を告ぐる。秋風。  
琴柱におつる。こゑく。

春秋を。富めり。  
月の影。おそし。

たゝすむは。誰々。  
光る源氏の。大將。

其六

たそやこの。夜中に。  
敵くごも。よも明けけし。

其七

七尺の。屏風も。  
羅綾の。たもごも。

又遠く催馬樂風俗の源流より來りて。時代々々の自然を失はざるものは。謂はゆる「はやりうた」にて。其足利時代のは狂言小歌にて今も其曲を遺せり。「春雨」に曰く。

春雨に。さすからかさの。柄もりして。腕まくりして。空見て。日はおどやる。しよぼこぬれたも。よいものを。かまへて干さいで。よい日にも。  
「宇治のさらし」に曰く。



宇治のさらしに。島に洲先に。立つ波をつけて。はま千鳥の。友よぶ聲は。ちり／＼やちり／＼。ちり／＼やちり／＼と。友よぶ處に。島陰よりも。船の音が。からりこりり。からりこりりと。漕ぎ出だいて。釣するところに。釣つた處が。おもしろいこの。

徳川時代に起りたる端唄といふものなども。是等の系圖を承けたるが。遂に其用ひらるゝ場所につれつゝ。偏に猥褻卑俗の點にのみ流れはてたるは残念なり。

誰が作りて何時代に謠ひ初めたるものなるかは知れぬと。兒童の間に行はれ。或は田舎人の口に傳はりたる歌曲。すなはち遊戯歌。手鞠歌。盆踊の歌。臼挽歌。田植歌。舟歌の類ふごの自然無罪なるものを聞かば。かの催馬樂風俗と同種なるをも發見すべく。足利時代の小歌と同先祖なるをも理會すべきが多からん。果して然らば。新體詩の參考室に是等の童謠俚歌を入るゝ事の必用なるは勿

論ふるべし。徳川時代の泰平や、其象を現はし。従つて文學の隆盛を見るに至りしは元祿年間にありし事。諸君は知らん。此時謂はゆる國學和學ふるものも大に其光を放ち。中古以來の亂れたるを治め。一にも二にも萬葉集の古に復さんといふ論おこりぬ。此に於て。一たび七五調に變遷し來りし長歌も俄に上古の五七調に復し。言語まで趣向まで萬葉時代を模擬する事とありしは。新體詩論者より見ては笑ふべく怪しむべきに似たれど。是も時勢の然らしむる處ありしかは如何せん。之を名づけて。假に萬葉模擬長歌の時代と稱ふべし。天保弘化の頃にあたり。海野遊翁といへる歌人いでゝ。長歌といへば必ず萬葉風の古言もてよむ習慣ふるを嘆き。之を改良せんとして。自身は近體すふはち古今集以後の詞もてよみいだせり。是また時勢のおのづから進み來れるを卜するに足らん。

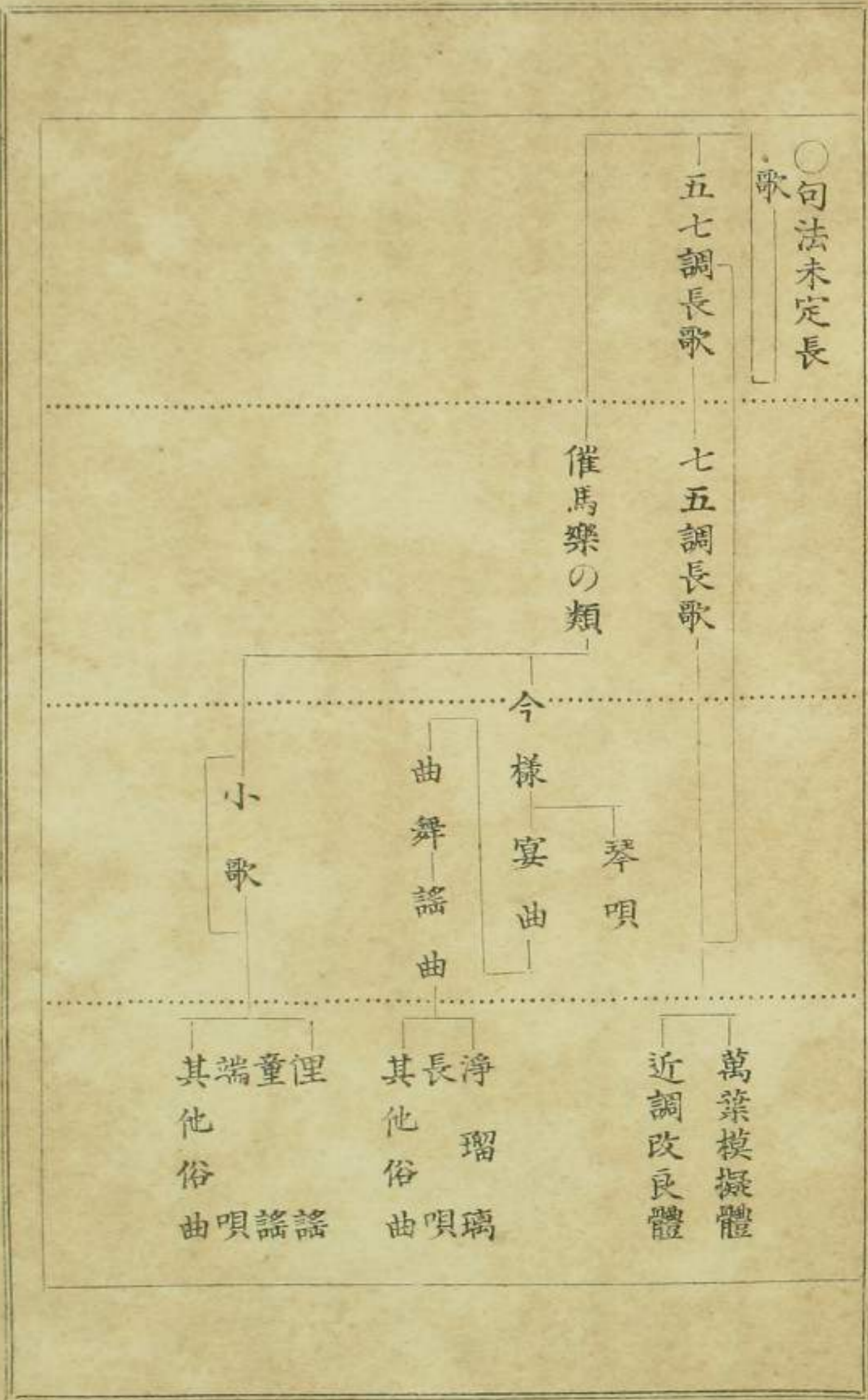
近年は神名川に辨玉といはれし僧ありて。長歌をもて名ありしが。つとめて新



事實新言語をよみこまんとせし跡の見ゆるは。また風潮の向ふ處を見るべし。維新後新學制の頒布せられてより。文部省音樂取調掛にては小學唱歌を作られ。式部寮雅樂所にては保育唱歌を起され。又宗教家にては讚美歌の翻譯成りなどしつゝ。或は古歌曲を折衷し。或は新歌曲を試作し。或は西洋歌曲を模擬翻案して。以て新體詩の一門を最初に開けるもの、如し。

然れども是ふほ唱歌の一部門ふれば。新體詩の目的を満足せしむるに足るものに非ず。今や之を作らんとて之を讀まんとして。希望を荷ふひつゝ、雜誌に新聞にあらはれ出づるもの。引きも切らざる有様あり。諸君に語るに先づ其沿革の大要を以てして。既往の變遷得失を叙するは。未來の作者たり讀者たる諸君をして。將來の變遷得失を未然に勸戒せしめんが爲めなり。請ふ左に再びあげたる系圖に就きて。既に述べたる要目を記憶し置け。

奈良以前 平安朝 鎌倉足利 徳川時代





(三) 種類

詩歌の種類を名づくるに。支那にては五言。七言。古詩。律詩。絶句等の稱を以てし。又古詩をば歌。行。曲。吟。ふ。と。細別して稱ふる事もあり。西洋にては。常にリツク(我感情を謠ふを主とせし歌)エピツク(作者が歴史家と爲りて記述せし歌)ドラマ(甲と乙との對話にふりたる歌)の三大區別もて稱ふるなり。我國古來の習慣は如何といふに左の如し。

- 發句……………十七字より成る
- 短歌……………三十一字より成る
- 旋頭歌……………三十八字より成る
- 今様……………四十八字より成る

長歌……………句數に限ふし

以上は歌人の手に成るものとして分類せられたるなり。此外の歌曲に屬する催馬樂謠曲等の類は。何れも其成立せる曲の名を呼ぶのみにて。歌人文人の新作を受け込むが如き餘地を與へざりしかば。別に其句法體裁等によりて文學上之を分類せし名稱は有らざりき。近日世上にて呼ぶところの名稱を記して見れば左の如し。

新體詩……………古格に拘はらざる長篇の總稱

唱歌……………樂器に合せて謠ふ歌曲の總稱。主として小學校女學校等に用ひらるゝもの

軍歌……………軍人の進行に謠ふべきが本にて。勇氣を振はしむるを主とせし歌。ことに幼少男子の書生社會に行はるるもの



讚美歌……………耶蘇禮拜堂にて謠ふもの  
以上は句格等の分類には非ずして。作者の目的と其用ひらるゝ場所とに依りて。稱へ馴らしたるのみ。

今あらたに之を分類するには。如何せば適當ならんといふに。先づ句格に依りて七五體五七體長短句體など稱へん事も便利なるに似たり。次の章にて詳かに之を言はん。

(四) 句 格

既に新體詩を興さんとする。もはや古格を墨守するに及ばざるは明かあらん。然れども根に意の向ふ處に任せて。惡句法を濫用し。口調にも讀者にも關係せざるが如きに至らば。歌にも詩にも文にもあらぬものさ爲るべければ。あらわす

め其標準をば立て置かざるべからず。立て置けばとて其範圍外に少しも出づるふと云ふには非ず。飽くまでも。其歌句とあるべきや否やを。研究の上にも研究して。新體を出だすべきを謂ふなり。今こゝに出來得るだけの句格を列擧して。參考に備へんとす。左の如し。

五四……………たがふらす。いとたけ。

つきのいろ。むしのね。

あらかふし。つれふや。

五五……………おもしろの。ありさまや。

ゆふぐれの。あきのかせ。

ふごりをし。くものいろ。

五六……………はるかせは。はふのうへに。

ちゝはゝは。なれどかたる。



五七

くはのため。すつるいのち。  
うぐひすの。きなくはるべは。  
いつかまた。わすれぬやどを。  
いざゆきて。わがどもとほん。

六四

くにかたぞ。こひしき。  
われとあそべ。はるかせ。  
たに、ひゞき。のにみち。

六五

ひけやひけや。このくるま。  
ちふひおちて。かせきむし。  
ひとはいつこ。ふかきよに。

六六

はるのいろは。そらにみちて。  
なれにつげん。たびのこゝる。

六七

きみのめぐみ。うるのごとく。  
いざうちつれ。のへにあそばん。  
まつのあらし。まくらにおちて。  
けふもふごり。つきこそそらに。

七五

ねぐらにかへる。ちふがらす。  
ひごむらさめの。あまやどり。  
つきよりほかは。とも、ふし。

七六

かみはめぐみを。のへのくさに。  
ながる、はふを。いざすくはん。  
このまをつたふ。ちきのしづく。

七七

わがやのまへの。やふぎのこかげ。  
そなてしきくは。いまこそつぼみ。



八四……………アジアのうみの、ひがしのそらに。  
ともせやほたるよ。そのひを。

八五……………こひしふるさとの。おとづれ。  
ゆふぐれしづかに。かたらん。

八六……………あさひにかやく。ひのみはた。  
いまはこれまでぞ。はなはねに。  
つきにもはなにも。すてられて。

八七……………あはれまつひとの。ふねはいづこ。  
のぼらばたかねの。くもゝきりも。  
うつくしきそらの。くものけしき。  
はゝあきわがやは。やみゆくこゝら。

八八……………かすみのひまより。みえゆくこする。

八八……………とりあきはふおち。はるいくばくぞ。

八八……………まつこそありけれ。うめこそありけれ。  
たてしきみづとり。そのかりそのかも。  
ゆみをれやつきて。わがこをばりぬ。

右は古歌の文句を抜き出だせるもあり。又余が舊作もしくは新に綴り設けたるもあり。此くの如く余が作を例に引かんは。甚だ不遜嗚呼のわざなりとの譏りもあるべけれど。古歌の文句中には例を容易に見いだしがたきもあり。又一二句くらぬ抜き出だしても。意味の續きを了解しがたきものも多く。しかのみならず。この例を擧ぐる目的は。諸君と共に出来得るだけ新體を博く用ひんとするに在れば。謂はゆる議案として拙作を提出したるものと知るべし。而して此諸體句格を用ひんに。たとへば。

七……………七……………







雲までひやく(七)ときの聲(五)

その世のうらみ(七)のころか今も(七)

あらしにさわぐ(七)かれすゝき(五)

(五) 段 格

文章にては意味の一完結する處を名づけて段落といふ。長篇の詩歌にも此事あり。然れども詩歌は文章とちがひて。其第一段と第二段以下の各段とは同句格なるを常とすべきふり。或は一段が五五。七五。七七。七六。ふるに。二段は七七。七六。七七。七五。などのやうに變化するは。特別の場合として許さるゝ外は。好ましき事ならざるべし。中にも音樂に合はせて謠ふ曲に至りては。最も每段句格を一致せしめざるべからざるは勿論なり。

さても此段數を重ねて用ふるといふ事。我國の歌に古より有りしや如何といふに。神武天皇の長髓彦を討ち給はんとせし時の御製に。

一。みつゝし。久木のこらが。粟生には。香韭ひとも。それがも。それめつなきて。討ちてし止まむ。

二。みつゝし。久木のこらが。垣も。こに。うゑしは。どかみ。口ひやく。われは忘れず。討ちてし止まむ。

三。神風の。伊勢の海の。大石に。這ひも。ごほろふ。しな。み。いは。ひも。ごほり。討ちてし止まむ。

とあるは。三首ふりとも見れば見らるれど。同じ時に同じ感情を同調同句格によりてあらはし給ひしは。取りも直さず一首三段の御歌として見るを得べし。神樂歌催馬樂に至りては。段を重ねたるもの多けれど。大方は謠ふ節の段落を本として詞を當てはめたるものふれば。歌の意味に關しては。寧ろ儀式に止ま



りたるが如し。此後は全く段を分け段を重ねる事絶えて。五七調七五調の古体長歌はいふに及ばず。今様宴曲謡曲浄瑠璃長唄端唄に至るまで其痕跡をも見ず。たゞ琴の組歌(前に例を出したるもの)に聊か之を見るが如きは。催馬樂の餘習を承けたるにや在らん。

支那の古詩に其例を求むれば。韻を換へて意味の轉化を知らしむる。是れ段ありたごへば。白氏文集なる上陽白髮人の詩に曰く。

上陽人。紅顏聞老白髮新。綠衣監使守宮門。一閉上陽多少春。

玄宗末歲初選入。入時十六今六十。

同時采擇百餘人。零落年深殘此身。

憶昔吞悲別親族。扶入車中不教哭。皆云入內便承恩。臉似芙蓉骨似玉。

未容君王得見面。已被楊妃遙側目。妒令潛配上陽宮。一生遂向空房宿。

秋夜長。秋夜無寐天不明。耿耿殘燈背壁影。蕭々聞雨打牕聲。

春日遲。日遲獨坐天難暮。宮鶯百轉愁厭聞。梁燕雙栖老休妬。

鶯歸燕去長悄然。春往秋來不記年。唯向深宮望明月。東西四五百回圓。

(下略)

然れども是等の如き例は。韻をこそ踏まれ人磨赤人家持ふどの歌にも或は多少見るを得べくして。獨り唐詩をのみ引くには及ばぬが如くふれども。韻を換ふるといふ點に著るしき注意を誘起する事なれば。段格を度外視する我國歌人の作ごはおのづから異なるべし。

西洋の詩には段數を重ねたる作の方多くして。一段ものゝ如きは殆んど稀に見る處あり。長きは一冊をも二冊をも爲す作ありて。従つて段落の多きも自然の勢なり。概して言へば。西洋は長きを尊び東洋は短きを尊ぶが如し。然れども山吹の莖短しとて捨つべきに非ず。藤の花房長しとて何ぞ卑しむべきならんや。あながちに短きをのみ優れりとし。長きをのみ美ふりとするは極端論者の言のみ。



新體詩の興りし以來。段を重ねて長篇をなすもの多く。今は誰も珍しきものごせざるに至れり。例の不遜ながら。段を重ねて作り試みたる拙作を議案に代へて。此章を終るべし。

冬の月

一。我はむかしの春の月

我はきのふの秋の月

つねに變はらぬ影なれど

世界はいつか老いにけり

夜ふく敵く窓の戸を

明けてむかふる人もなし

二。白妙ひろき園のうち

いづこに影を休らへん

そよ吹く風にさそはれて

花に遊びしおぼる夜は

あふるゝ情をうつたふる

少女の歌も聞きつるに

三。馴れて訪ひよる高殿の

あたりに琴の音も絶えて

ひごり時めく燈火の

閨もるひかり細りゆく

はしる寝のうしろより



廊下をめぐるさびしさよ

四。堤の木の間あらはれて

したしく向ふ水の面

いまは鬢をかくしつゝ

氷の底にねむれども

我こそまもれ來ん春の

歌ををさむる汝が胸を

五。麓にいそぐ獵人を

おくりしあとの谷の空

こだまに吠ゆるおほかみは

落葉にうつむ棧を

我ふぐさむる音楽か

あらしと二人うち渡る

六。天ぎる雪とたゝかひし

波に打たれて碎けても

恨みも敵も知らぬ身は

光しづかに笑ふのみ

くまふき海よ我舞臺

いかれる海よ我旅路

七。我は今宵の冬の月



我は來ん世の春の月

神代のまゝの影ふれど

世界はまたも若やがん

霞の衣につゝまれて

高嶺のどかに立たん時

(六) 詞の撰方

上に説き來りし句格と段格とは。外面にあらはれたる新體詩の形ふるを知るに足らん。而して之を組織する用語は如何と問はゞ。既に新體詩と號して明治世界に現出せし以上は。明治今日の普通言語を用ふべきは勿論ふりど。誰も答ふるふらん。然りし余も此答には大きに同意するものふれども。甚だ困難なる

は。明治今日の普通言語とは。如何ふるものを指すかの標準に苦しむ事これなり。先づこゝに今日行はるゝ言語の種類を大別して見れば。

談話に用ふる言語の内に

方言……………東京詞とか上方詞とか區別する如く。地方々々にて異

ふるもの。

階級による詞……………上等社會と下等社會とによりて異なるもの。

職業による詞……………書生とか兵士とかによりて多少異なるもの。

性による詞……………男女によりて異なるもの。

文章に用ふる言語の内に

和文的……………古事記萬葉集を擬し伊勢源氏を擬するなど色々あれ

ど。古文を模擬するものを總べて云ふ。

漢文直譯的……………漢文に訓點つけて讀みたる如き語勢のものを



云ふ。わるくすれば文法上の過去未來も自他の別も無きが多し。

洋文直譯的……英獨佛蘭に拘はらず。すべて西洋文を譯讀せし

如き語勢のものを云ふ。

折衷的……以上和漢洋三種の語勢を折衷して用ひたるもの。新聞

の論説ふご多く之を用ふ。

通俗的……婦女子にも博く讀み易からしむるを目的とせしもの。

徳川時代の草雙紙また今日の新聞雜報に多く之を用ふ。

書簡的……書簡に常に用ふる可被下奉存候の語勢を云ふ。

ふほ之を細別せば幾十種類にもふるべけれど。強ひて必要の問題にも非ざれば。こゝらにて止めつ。さても右の種類の内。談話に用ふる言語と文章に用ふる言語との兩立して。而して歌詩に適するは文章に用ふる言語。すふはち文語に

在ること。勿論なるべし。是れ言文一致の西洋ごちがひて。我國語特有の慣例ふればなり。

然らば文語の内にては何種を撰ぶべきぞ。通俗的こそ新體詩の趣意を得たるものなれば。之を用ひん事も希望すべきふれども。如何せん通俗的といふもの。未だ其標準を確定せざる今日ふれば。動もすれば卑俗に流れ不規律に陥るが如き。弊害を來さん恐れも無しといふべからず。唯その各種文語の内より。優れたるを採り美なるを集めて撰び用ふるの勝れるに如かざるふり。其撰方は左の如し。

(イ) 穩なるを撰べ

(ハ) 優美なるを撰べ

(ホ) 口調あしきを避けよ

(ト) 突然ふるを避けよ

(ロ) 簡潔なるを撰べ

(ニ) 分りにくきを避けよ

(ヘ) 卑俗なるを避けよ



(イ)穩かふるを撰べ……とは。無理ならぬ言葉を使へといふ事なり。或る歌人の。「朝顔の花」夕月の影ふといふは既に珍しからずとて。常に「花の朝顔」月の夕影ふといふ詞をのみ使ふ癖ある如きを戒むべきなり。また唐詩の「夕陽春」を直譯して「夕日うつつく西の山の端」と使ひ。西洋語氣を擬して「月こそ躍れ」山ぞ手を拍つふといふ如き。殊更に詞を新奇にして讀者の耳目を驚かすを以て快とする類は宜しからず。免に角に誰が見ても言語の上には無理なく。ひたすら平穩ふるを主とすべきなり。此目的を妨害すべきものは(ニ)の處に説くを待て。

(ロ)簡潔ふるを撰べ……とは。ふるべく短き詞にて意味に不足なきものを用ひよといふ事なり。「うちゑむ顔」といはんよりは「ゑがほ」といふ方優るべく。「父母の子をいつくしむ心」といはんよりは「父母の慈愛」といふ方優るべき類なり。誰かの評に「秋のはじめになりぬれば。今年も半は過ぎにけり」は。詞を替へて同

く意味を繰返したるふれば簡潔ならずと云ひしも。其理なきに非ず。和文的の流弊には随分かくの如き語勢おほきを注意すべし。又洋文直譯的より來るものにも頗るくごき言方あるを覺ゆ。此くごき言方こそ簡潔の反對なるものご知るべし。

然れども。漢文直譯體の如き文法上の過去未來も無く。自他動詞の差別も無きに至りては。詞短くして簡單ふるには似たれど。我國語として意味を完備せざるものふれば。決して簡潔としては許しがたし。是また注意を要せざるべからず。

(ハ)優美ふるを撰べ……とは。ふるたけ美しく上品ふる詞を用ひよといふ事なり。美しく上品ふる言方の説明は前篇修辭學に出でたり。此目的を妨ぐるものは(ヘ)の處に説くを待て。

(ニ)分りにくきを避けよ……とは。或る一種一方の學者などからては。通じに



くきやうの詞を用ふふといふ事あり。先づ其通ずにくき詞の因つて来る源を尋ねれば。左の二類に歸すべし。

和文的より来るもの……古言をのみ尊しと心得て。讀者にひろく通ずる否やとは不問に措くが如き弊あるを云ふ。

漢文直譯的より来るもの……動もすれば未だ我國の普通語とならぬ熟字を濫に用ひて。耳に發音のみを聞きては分りがなきをも願みず。前後の國語と調和せざるをも省みざる如き弊あるを云ふ。

そも〜歌詩の散文より比較的に高尚ふるは。意味の優美高妙ふる點に在りて。用語のむつかしきが爲めには非ず。然るに之を誤解する人は。徒らに用語をむつかしくして物知らぬ輩に誇らんことす。謂ハゆる鬼の面を被つて小兒をおどかす類のみ。緋の衣を纏ひて愚夫愚婦を惑はす類のみ。迷へるの甚しきに非ずや。

(ホ)口調あしきを避けよ……とは。和漢洋いづれの種類より來れるを問はず。發音しにくく、耳に障る詞をば用ふふといふ事なり。歌詩は意味を主とする事勿論ふれども。用語の流調活達ふらざる時は。讀者の耳に遮られて意味を其心中に傳達する能はざること。猶かの畫師の趣向は如何に好くとも。運筆の拙なき時は畫として見られざる如し。用語は詩歌の運筆あり。用語の撰擇に熟せずして詩歌が作らるゝふらば。運筆を習はずして畫師にふらるゝ答あり。豈此くの如き理あるべしやは。

(ハ)卑俗なるを避けよ……とは。聞くも厭はしき下品の詞を用ふなといふ事あり。たとへば「内のかゝあの言ふことにはや」とか「大めしくらひの三太郎」とかいふ如き文句が。新體詩の中に在りしと聞かば。誰も其奇怪ふるを笑ふべけれど。未だ用語の標準定まらざる間は。是に似たること決して無しともいふべからず。既に古體の和歌大家にさへ。通俗と卑俗とを混同して。お三ごんの居眼り



を歌によみ。馬士の居酒屋にて酔ひ倒れたるを三十一文字に綴り出でたるさへ有りといふ世の中ならずや。上下を通じて誰にでも分るは通俗なり。下等社會にのみ行はれて教育ある以上の人に厭ふべく嫌ふべき感情を伴起せしむるものは卑俗なり。此別を混同してはふらざ。

(ト)突然なるを避けよ……とは。詞の釣合調和を好くせよといふ事なり。和文的の文句の中に突然と漢語的の用語を交へ。極めて通俗の語氣の中に求めて高尚の雅言を一つ挿し入るゝ如きは。西洋料理に澤庵漬の一品を添へ。能舞臺に洋服の役者を加ふる類にて。讀者の惡感情を誘起するのみに止まるべければ注意せざるべからず。されば謠曲の文句には常に其調和を圖りしと見えて。西王母には。

花も酔へるや盃の。手まづ遮る曲水の宴。かや御河の水に。戯むれ戯むる、手弱女の。袖も裳裾もたなびきたふびく。雲の花鳥春風もはるに和しつゝ。雲路に

うつれば。王母も伴ふひ舉ぢのぼる。

と云へり。曲水といひ王母といひ。字音の詞を使へる釣合を取らん爲めに。春風に和しつゝの句を置きたるものなるべし。また田村に。

いかに鬼神ももたしかに聞け。昔もさるためしあり。千方といひし逆臣に仕へし鬼も。王威を背きし天罰にて。千方を捨つれば忽ち亡び失せしぞかし。

とあるなどをも思ふべし。然れども同ト漢語より來れる詞の内にも。菊蝶琵琶馬帽子の如く。既に我國語かと思はるゝ程調和したる詞は。固より突然を嫌ふべくもあらず。また突然といふ感もも起るまづければ例外なり。今や支那よりも西洋よりも其國語を頻々輸入し來り。我國語は好んで之を受け得らるゝだけは受け込まんとする時節なれば。今日突然と名づけて怪しむものも。明日は調和して固有の國語かと思はるゝに至らんは當然なり。然れども輕々しく突然の文字を看過して。歌詩の體面に傷つけんは苦々しき事ぞかし。況んや歌詩には



用語を撰ぶが必要なるをや。日用品の如く便利にさへあらば外國品でもかまはざるものに非ざるをや。

## (七) 意匠の工夫

余は先年畫の展覽會を見に行きし事あり。筆力の巧拙等は論題外として。先づ其趣向の如何を調べて見たるに。一方には花鳥山水人物より觀音道成寺に至るまで。百千の紙面に筆者の替はりたるといふのみにて。ごこが其畫師の意匠を費やしたる處ふりや。何くか其人の特點を認むべき趣向なりや。なほ去年も今年も畫といふは同トものかなとの感<sub>レ</sub>を起されし類いくらありしか。數へもつくすべからず。是れ果して美術の目的ふりや。之を見て愛し之を購ひて賞する人は。日と共に世と共に新たにふりつゝ止まざるに。其愛賞せらるべき

美術のみ人に背きて一步をも進めざるは。あに衰運の前兆ならずやと。ひそかに思ひし事ありき。

又一方を見れば。新案をもて満たさんとするが如く。是まで畫題としてあらはれざりしものゝ掲出せられしこそうれしけれ。然れども題いかに新らしくとも。意匠いかに珍らしくとも。唯あたらしめづらしとのみにて。美術として珍重せらるゝに足るものふりや。畫題として愛賞せらるゝ性質のものふりやを研究せざる如きは勿論不可あり。今かの謂はゆる新案ふるものゝ二三をいはい。下婢臺處にて釜の下を焚きつくる圖。下宿屋の二階に破ゲット古枕ふとの散亂せる圖。神葬祭を送る圖。ふとの類ボンチ畫鳥羽畫または小説の挿畫などには或は通すべけれど。畫題として美術品の意匠として。持出だすべきものならぬは。諸君も同意せらるゝからん。

新體詩にも此事あり。たゞ句格段格と用語とが新體をふしたるのみにて。趣向



は依然たる人麿赤人以来の舊體にて變化を見ざる作の如きは。かの百人千人同意匠同圖案の楊柳觀音道成寺亂拍子の流ふらすや。又たゞ新案をのみ立てんとして。乞食の喧嘩。裸體の美人。などを題とし趣向とする如きは。かの一時看客の笑を買ふに足る臺所下宿屋の真景と何ぞ撰ばん。新體詩は何くまでも詩たり歌たる資格を存すべきあり。かゝる意匠は用ふる處ふさなり。

右二つの弊は何れも挿はざるべからざる中にも。後の方は苟も詩歌の作者たらんと志すもの、誤る場合は少ふかるべけれど。前の方は堂々たる大家と呼ばれる人々の中にも。常に之を挿はんとする勇氣に乏しきが多ければ。ねんごろに反復注意せざるべからず。

左に富士の山をよめる長歌を並べあけて。其特點は各その間に如何程づゝあるかを感せしめんぞす。

萬葉集山部赤人の歌に。

天地の。わかれし時也。

駿河なる。富士の高嶺を。

渡る日の。影もかくろひ。

白雲も。いぢきはかり。

かたりつぎ。言ひつぎやむ。

同集よみ人しらすの歌に。

あまよみの。甲斐の國。

こちよみの。國のみふかり。

天雲も。いぢきはかり。

もさる火を。雪もて消ち。

言ひも得ず。名づけも知らず。

せの海と。名つけて有るも。

神さびて。高くなふとき。

天の原。ふりさけ見れば。

照る月の。光りも見えず。

時くぞ。雪はふりける。

富士の高嶺は。

うちよする。駿河の國と。

出で立てる。富士の高嶺は。

飛ぶ鳥も。飛びものぼらず。

降る雪を。火もて消ちつゝ。

靈しくも。います神かも。

その山の。つゝめる海ぞ。



富士河と。人のわたるも。  
日の本の。やまごの國の。  
寶とも。ふれる山かも。  
見れど飽かぬかも。

その山の。水のたぎちぞ。  
鎮めとも。います神かも。  
駿河ふる。富士の高嶺は。

加茂真淵の歌に。(以下は徳川時代)

磯まより。そがひに見ゆる。  
狭きかも。ふりさけ見れば。  
低きかも。天の原ふる。  
風のまに。横ほる雲に。  
相模嶺の。峰も雨ふり。  
六月の。照る日の空に。  
常夏に。雪ぞふりける。

駿河の海。沖つ波路は。  
相模嶺の。八重山峰は。  
富士の嶺の。麓を出で。  
駿河の海。沖もかくろひ。  
時のまに。神も鳴りゆけど。  
顯はれて。曇るともふく。  
富士の高嶺は。

本居宣長の歌に。(畫に題せるなり)

あやに〜。高く尊く。  
現世の。神とも神と。  
高山を。小田のつむれと。  
檀の寶の。ひどりぬけで。  
天ぞり。そり立たせり。  
ふりさけて。見し人こそは。  
奇はしき。事は知るらめ。  
いまだ見ぬ。人はかつと。  
此かたを。見てもしぬばね。  
くすはしきこと。

奇はしき。山は富士の嶺。  
たなづく。四方の村山。  
足もこの。麓にふして。  
青雲の。棚引く空に。  
其山を。たに正月に。  
誠しか。高くなふとく。  
鳴神の。音のみきゝて。  
月草の。うつし書きたる。  
此山の。高くなふとく。

栗田土満の歌に。



うちよする。駿河の國と。  
 國はしも。異にあれども。  
 村山の。うへにぬけで。  
 富士の嶺は。奇しき山か。  
 天の原。かすみ立ちこめ。  
 夏の日も。消ゆる時ふく。  
 もみち葉の。秋に至れば。  
 白雲の。八重雲のうへに。  
 いにしへに。いひける如く。  
 遠からず見ゆ。

霧ふり。遠つあふみと。  
 村山は。へふりてあれど。  
 天ぞり。高く見えたる。  
 み冬つき。春さりくれは。  
 時鳥。來ふく五月の。  
 白雪の。ふりてつもれり。  
 麓へは。霧たちわたり。  
 此山を。ふりさけ見れば。  
 天地の。あひ去る事も。

いづれも萬葉を祖述して布演せるに過ぎざるを感すべし。以上の歌を讀みて是までの歌人が古歌の口うつしを主とせし弊を思ひ知ると同時に。新體詩は此く

の如く異口同音的の物なるまじきをも悟るべきなり。橘曙覧といへる歌人の隨筆「ぬるりはふし」にも。既に歌題の狭くなりたる事を嘆じて曰く。

小澤蘆庵翁の歌に。いにしへは。大根は。かみ菲なすび。瓜のたぐひも歌にふみけり。といへるは。歌をむげに狭く取りふし。古き集ごもに例あるもの、外には。題もたやすくはものせず。ふべて海月ふす筋も骨も無きものによみそこふひ來れるわろぐせを。看破せられたるものにぞあるべき。誠に中頃よりこふた。歌は詞艶に姿ふつかしく。なけをあらせ幽玄によむべしと。ひたぶるに教へたて。かのよき女の惱める處ありとわいふ風情のみをよき事に心得。執するがあまりのはてしは。謔に謂はゆる正月詞といふもの、やうにいつも定まりて。早春には。朝日のどかに。霞たふびく。歳暮には。よする年波。春ぞまたる。花には。雨のめぐみ。家づとに折る。月に。くまなき影。雪に。あどつけわぶる。ふとやうの詞の外には。世に歌詞



はふきものゝ如くにふり。百人が百人。一昨年も去年も今年も。同じ事をのみいひふらぶる事にあさましき。近き頃廣瀬旭莊といふ人が。亨保元祿の頃の詩人の琴柱に膠すといふやうなる風體を嘲りて。白雲明月句。多<sub>ク</sub>於魚卵繫。といひたりしも。蘆庵翁のいきごほりにひとしき心ばへど見えたり。云々。

一讀もつて無氣力歌人の肝を冷やすに足るべし。既に生活せる作者が意匠を構へて生活せる讀者を感動せしめんとする詩歌をして。死物も同様の死題枯趣向を反射せしめんとするは抑も何の意ぞや。思はざる可からざるふり。

今こゝに新作の趣向を考ふるに當り。必要の箇條をいさゝか示すべし。その第一は。模擬といふ事を離れて唯我思想感情をあらはすを主とすべし。同じく月を見るにも。國學者は「あはしが原の波間より」と直に神代紀に想像を馳せ。武士は「いつか散の上に照るや」と慷慨おく能はざる情を洩らし。おのゝ其境界

法 新作趣向

によりて趣を異にするは事實なり。天地は開闢の天地ふれども。人間は人麿赤人時代の人間にあらず。古体詩歌の模擬は甚だ忌むべく厭ふべきの極なり。小兒は何れも獨樂を廻し風を揚げ。昔話を聞き唱歌を謠ふを以て無上の快樂とするものなれども。大人は其樂しむところ各異なり。さらば小兒の作る新体詩も大人の作る新体詩も。同一轍の感情もて満たさるまじきは論なからん。また以て小兒が大人の詩歌を模擬する事の。必ずしも當るまじきを證するものなり。模擬の意匠上に嫌ふべき此くの如し。中にも既往に屬する死題枯趣向のいつまでも繼續すべきを特に憂ひて寛假せざるは。今日の有様止むを得ざるのみ。第二は。變化あらしむべし。たとへば旅行する人の身に取れて見よ。行けども行けども同じ枯野の平原にて。川もふく山もふく。海も見えれば里も來らぬ處を過ぐるにせは。遂には心倦み神疲れて旅路の面白からぬを感ずるに至るべし。是れ景色の變化なきが致すところにて。詩歌文章に於ける讀者の退屈も。此



くの如きものあるふり。之に反して。紅葉あやおる絶壁を下れば玉みなぎらす急流あり。青山むかふれば白雲おくり。海かと思へば松原つゞきて。忽に目先のかはる風光を眺望しつゝ、走りゆく汽車の旅行は。其變幻の千態萬狀なるに心奪はれて。路の長きも時間の長きも覚えざるべし。是れまた詩歌文章に於ける作者の手段も。此くの如きものあるなり。

然るに古體の長歌を學ぶもの。上に出だせる富士の歌の例の如く。終始同くやうの事を長々といひつゞくるのみにて。謂はゆる「かけまくもあやにかしこき」に始まりて「かしこきるかも」に終る類のものならでは多く得難きは如何ぞや。この變化に熟せんとするには。支那の詩をも西洋の詩をも讀み馴らさば。おのづから得る處もあるべし。我國のものにても謠曲などは。さすが大仕掛の事なれば。或は舟辨慶の如く。静の愁傷を盡す間もふく。知盛の幽靈を出だして海上激戦のさまを畫き。或は蟬丸の如く。一たびは姉宮蟬丸再會の御歡を盡し。忽に

して離別の御悲を叙するふど。變化の妙用を極めたるもあり。とにかくに誰かの言ひし如く。波もふく趣もなき平面の湖水にふらぬやうに。心を用ひんことを忘るべからず。

第三は。ふるたけ博く新題を用ひんとすべし。是まで和歌によむべき材料といへば。花は。

- 梅 櫻 桃 李 梨 山吹 藤 躑躅 菜花 堇 牡丹 杜若 卵花
- 花橘 瞿麥 百合 夕顔 萩 薄 女郎花 藤袴 朝顔 月草 葛

菊

などに限りて其他には及ぼさんともせざるが歌人の習慣ふりき。然れども花の愛すべきもの豈これのみに止まらんや。野覆盆子の花の淡泊なるも。雪の下の涼しげふるも。又すつべきものあらんや。畫師の筆には既に入れり。新體詩家の採集袋は是等の草陰に分け入らん事を欲するなり。



須磨明石の月影は古人すでに詠盡せり。吉野龍田の花紅葉は先達すでに吟ト盡せり。殆んど又筆の入れやうも無き程ふるべし。然るに幸にして古人の足跡を入れられざる第二の須磨明石ありとせんか。それこそ我々新體詩人の領し得べき屈竟の地ふれば。我より古を爲して名作と共に名所たらしめんこと。愉快限ふきわざふらずや。山陽の筆これを傳へて豊前の耶馬溪天下に知られ。柳北の文新聞に出で、小向の梅林府下に鳴りたる例も近くにあるものを。

鶴岡の静の舞。安宅の關の辨慶の杖。歴史上の名高き物語は。大方名文名歌に網羅せられて遺すなし。然れども猶餘地を與ふるは。櫻田の雪上野の嵐。維新史の上にも隨分望を屬すべきあり。況んや之を外國に探らば。我國語もて反射せらるべきもの無量ふらん。起てよ——新詩體家。材料は満ちたり新題は富みたり。何ぞ試みもせずして古人に奪ひ盡されしこの言をば爲す。

第四は。好んで新空氣を吸取せよ。古來歌人の吸取しつゝ有りし他界の空氣は

といはゞ。白氏等の詩句と經文の文句とを題にして。其小部分を譯述せしくらぬに止まれり。新體詩興りてよりは。西洋の詩を譯せしもの唐詩を翻せしもの續々と出で。其風體を學び其精神を寫したるものも從つて多きを加へぬ。是れ新空氣の我文學界に壓入せんとして。其間隙を見出だしつゝ有るものあり。吸取せよ——我國の歌に微妙の優點あると同時に。彼國の詩には拔群の長處ある事を忘るべからず。我を捨て、彼をのみ取るは僻見ふれども。我ある上に彼をも用ふるは其れだけ文學界の區域を擴むるものあり。況んや長篇偉作は彼の特有たるは争ふ可からざれば。之を移して我國に栽ふ。之に培ひ之に水かひつゝ。以て東洋の花たらしめん事。もつとも望むべき業ふるべし。日本の白居易は既に功を奏して地下に眠れり。日本のミルトン「失樂園」を石山寺に草せんこと何れの日ぞや。讀者は盛に新空氣中に泳游しつゝ有るに。作者は靜に舊天地間に枕を高くせんこと。誰か之を是ふりと言はん。



(八) 装詞の種類

古より用ひ來れる装詞に。

(一) いひかけ

(二) 縁語

(三) 序詞

(四) 枕詞

の四種あり。中にも枕詞は多く古體(特に萬葉模倣)の長歌に用ひられ。いひかけ縁語は著るしく謠曲にあらはれたり。今これらのをば依然として新體詩の舞臺に現出せしむべきものふりや否や。是れ既に我國語特有のいひかたなりとすれば。もとより放逐すべき理由もあらず。讀者の許すかぎり用方の無理ふらぬ限は。其可否を撰び用ひて其愛嬌を添へんに妨なかるべきなり。唯其いひかたをのみ面白くして讀者を眩惑せしめんとし。精神を忘れて虚飾にのみ走る如

きに至つては言外ふるべし。先づ其四種のいひかたを示さば。

(一) いひかけ………とは。一語に二意を含ましむるものを云ふ。大江山いくの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立といへば。行くと幾野とを兼ね。踏みと文とを兼ねるが如し。是には三つの種類あり。第一に形を變へざるもの。第二に上下の繋ぎに置くもの。第三に同音を重ねいふもの。是ふり。第一に形を變へざるものとは。いひかけを用ふる爲めに詞の表面の動かぬをいふ。たとへば。

イ。世を今さらにあき(飽。秋)はてぬとか。

ロ。我身よにふるながめ(眺。長雨)せしまに。

ハ。ゆき(雪。行)のまに〜あさは尋ねん。

ニ。都をば霞と共に立ち(人の出立する)しかど。(霞の立つと)

の如く。表面にあらはれたる一意をのみ持ちたりとせんも。文法上さらに差支



ふき類あり。

第二に上下の繋ぎに置くものとは。上より言ひ來りたる詞と。下に言はんとする詞と同音ふるを合せ用ひて。兩方の用を勤めしむるをいふ。たとへば。

イ。天ざる雲の(降)古枝をも。

ロ。さては疑ひ(不有)嵐の音に。

ハ。人(待)松虫の音に立て。

ニ。奥は(暗)鞍馬の山道の。

ホ。心(盡)筑紫のはてにある。

ヘ。樂の名をも(聞)菊の水。

の類。之を文法上の平語に直す時は。

イ。雪降りつもる古枝をも。

ロ。疑もあらぬ嵐の音に。

ハ。人待ちてなく松虫の。

ニ。奥はくらき鞍馬の山路の。

ホ。心盡し、筑紫のはての。

ヘ。樂の名を聞く菊の水。

などいでは叶ふべからず。今これを一語にて簡略風雅に兼ねしむること。いやみふく自然にさへ用ふる時は。實に面白きいひかたと爲るべし。

第三に同音を重ねいふものとは。上より言ひ來りたる詞と。下に言はんとする詞と同音ふるを重ね用ひて。口調をおもしろくするをいふ。たとへば。

イ。柴の庵のしほくも。

ロ。粟津の原のあはれ世を。

ハ。越の白山知らねども。

ニ。浮き立つ雲の憂き世かふ。



ホ。海士小舟あまりひまふき。  
 ヘ。かみは加茂川しもは去ら川。  
 の類なり。これもいやみふく自然ふらん事を要すべし。

(二)縁語………とは句中の詞に縁ある文字を特別に置くを云ふ。たとへば。

イ。旅衣末はるく都路をけふ思ひたつ浦の波。(高砂)  
 ロ。見るまゝに露ぞこぼるゝおくれにし。心も知らぬ撫子の花。(後拾遺集)

ハ。月は一つ影は二つ。満つ(三)汐の夜る(四)の車に月を載せて。うしとも思はぬ家路かふや。(松風)

ニ。花見車の八重一重。見え(三重)て櫻の色々に。(右近)  
 の類にて。此内イの例は。旅情をのべんとて旅衣といひたるより。衣に縁ある「張る」「裁つ」「裏」などの文字を「遙」「立つ」「浦」の詞に含ませていへるふり。是は常に

いひかけの第一種を借り用ふる事なり。

ロの例は。愛兒を撫子の花に比して言へるにつきて。涙の事を花に縁故ある露の文字もていひかへたるふり。ハニの例は。数字をふらべて面白くいひなしたるまでなり。

以上縁語に三種ある内。イとハニの例は。謡曲ふど常に好みて用ひし事ふれど。いかにも下品に聞えて新體詩中には列席をゆるしがたきが如し。唯ロの例のみ自然の用法を得ば詩中の花と爲りて輝くべし。

(三)序詞………とは。主たる文句を呼び起す爲めに。他の文句を冠らして装とするを云ふ。是に三種あり。第一に比喻を用ふるもの。第二にいひかけの第二種を用ふるもの。第三にいひかけの第三種を用ふるもの。これなり。

イ。蘆鴨の羽風になびく浮草の以上なだめなき世を誰か頼まん。(新古今集)  
序詞



ロ。思ひ出づる折りたく柴の夕煙以上むせぶもうれし忘れがたみに。同書

ハ。今はた賤が繰る糸の以上長き命のつれふさを。(安達原)

の如く。眼前の事物に就きて比喻の前句を置き。感情を強からしむる方法あり。たゞ縁故もふく眼前にもあらぬ事物をわざと持ち來りて。序詞に用ふるふどは尤も禁せざるべからず。

第二にいひかけの第二種を用ふるものは。たとへば。

イ。吹くや嵐の以上多。大井山。捨つる身に無き以上友伴の里。今ぞうき

世を以上離はなれ坂。くだす筏の以上板。板鼻や。佐野のわたりに着

きにけり。(鉢木)

ロ。波路はるかに行く舟の以上權。かいつの浦に着きにけり。東雲はやく

明けゆけば。浅茅色づく有乳山。氣比の海。宮居久しき神垣や。松の三字

序詞

(木の芽)きのめ山。なほゆくさきに見えたるは。山以上杣山人の以上板取い

たどり。山名川瀬の水の以上浅。あさうづ地名や。末は三國の湊ふる。蘆の

篠原ふみよせて。靡く嵐の烈しきは。花の三字仇。安宅に着きにけり。

(安宅)

ハ。梓弓押して以上張。春雨けふ降りぬ明日さへ降らば若菜つみてん。(古今集)

今集

ニ。風さむみ伊勢の濱荻わけゆけば。衣序詞借。雁金ふみになくふり。(新古今集)

今集

の如く。特別に他の文句を前に置きて裝飾となす方法あり。彼いひかけの第二種を用ふれども。それと全く同じからぬ點は。彼いひかけは上下の詞。たとへば「雪の降る」と「古枝」との二句を。「ふる」の詞にて一つに結びつくるものなれば。上の詞の「雪の降る」も下の詞の「古枝」も共に文面に必要の文字なれども。此序詞



は「伴の里」をいはんために殊更に「捨つる身に無き」を置き。「春雨」をいはんために態々「梓弓押して」を置くの相違にあり。固より此序詞にも。「波路はるかに行く舟の」の如く本文を直に用ふる事もあり。又「松の木め山」の如く形容詞のやうに其實景を直に序とする事も常なれど。本體は下句に就きて序ふる上句の添はりたるに在るふり。

第三にいひかけの第三種を用ふるものは。前に出だしたる例の如く。「柴の庵のしばし」も「粟津の原のあはれ世を」ふどのいひかたにて。上の詞の「柴の庵の」粟津の原の「ふどが」本文ならばいひかけの第三種と心得べく。又特更に同音を重ねんとて態々置きたる句ふらは序詞と心得べき事。前の第二の例に同じきふり。

(四)枕詞………こは。五言の句に置くべき序詞にて。古來用格の制限を一定せしものを云ふ。故に序詞第一種(比喩的)に屬するものには。

イ。菅の根の……………(長き春日)

ロ。春草の……………(しげき思ひ)

ハ。花すゝき……………(ほに出だすべき)

ニ。行水の……………(早くの世より)

ホ。朝日かけ……………(にほへる君)

の類あり。第二種(二意兼用)に屬するものには。

イ。梓弓……………(張)春

ロ。海士小舟……………(泊)初瀬

ハ。春の田を……………(耕)かへすもも

ニ。異竹の……………(節)伏見の里

ホ。焼太刀の……………(鞘)さやの中山

の類あり。第三種(同音重用)に屬するものには。



- イ。稻舟の……………いなにはあらず
- ロ。岩清水……………いほで心に
- ハ。花がつみ……………かつ見る
- ニ。かへる山……………かへるくも
- ホ。うちよする……………駿河

の類あり。以て其序詞と本は一つふるを知るべし。此外に普通の形容詞が定格と爲りて枕詞の名を詞たるものあり。たとへば。

- イ。草枕……………旅
- ロ。鶯の住む……………筑波の山
- ハ。蘆が散る……………巖波
- ニ。露霜の……………秋
- ホ。み雪ふる……………冬

の類なり。然れども是等は枕詞として定格を立つる程の價值も無ければ。どうでもよき事とすべし。

さて此枕詞は新體詩に用ふべきか如何といふに。五七調のものには裝飾として稀に用ひんも然るべけれど。既に古來何千萬人の歌よみが使ひふるしたるものを。今我々が洗濯して着用せしめて。面白くもあるまじければ。先づは古歌の裝飾として床の間に仕舞ひおく方よかるべし。況んや七五調其他のものには用ふる場所も無ければ廢物たるべき事勿論なり。

以上の諸例ともに用法の可否を判定し。讀者をして虚飾ふりいやみふりとの惡感情を起さしめざらん事に。くれぐれも注意せざるべからず。たゞく自然の勢に任せて。知らずくの間装を爲したる如き手段こそ望まじけれ。

(九) 文法の變格



文法は我言語を正しく發音し。我文章を正しく書き綴る法則あり。詩ありとて歌ふりとて之に違背せん道理あるべしや。たゞ詩歌には普通とかはりて珍しき言方を許す場合は散文よりも多きのみ。

先づ其第一は倒句を多く使ふ事なり。たとへば。

イ。風……………が……………雪……………を……………掃ふ。  
ロ。書生……………が……………詩……………を……………吟ず。

といへば普通の言方にて正句ふるを。此順序を換へて同じ意味に。

甲。風……………が……………掃ふ……………雪……………を……………  
書生……………が……………吟ず……………詩……………を……………  
乙。雪……………を……………風……………が……………掃ふ。  
詩……………を……………書生……………が……………吟ず。  
丙。雪……………を……………掃ふ……………風……………が……………

詩……………を……………吟ず……………書生……………が……………  
丁。掃ふ……………風……………が……………雪……………を……………  
吟ず……………書生……………が……………詩……………を……………  
戊。掃ふ……………雪……………を……………風……………が……………  
吟ず……………詩……………を……………書生……………が……………

など種々の言方を爲すを云ふ。是れもとより力ある詞を前に置き。又は口調を助くる爲めには。止むを得ざるのみか。最も必要の場合おほかるべきあり。今なほ右の例を確かめしめんために。歌句とふして對照せば左の如し。

甲。あらし……………ぞ……………誘ふ……………峰のもみち葉  
(風……………が……………掃ふ……………雪……………を……………)  
乙。もみち葉……………を……………風……………こそ……………誘へ  
(雪……………を……………風……………が……………掃ふ……………)



丙。霞……………吹き解く…春の山風

(雪)……………を…掃ふ……………風……………が)

丁。たゞくわ…月……………は……………柴の庵……………を

(掃ふ)……………風……………が……………雪……………を)

戊。よするよ…花……………を……………池のさゞ波

(掃ふ)……………雪……………を……………風……………が)

其第二は略句を多く使ふ事なり。たとへば。

イ。日は山にのほり鳥は野に歌ふ。

ロ。けふも蝶と遊び友と戯むる。

といへば普通の言方にて正句なるを。動詞を略して。

イ。日は山に鳥は野に。

ロ。けふも胡蝶と我友と。

ふどの如く用ふるを云ふ。古歌にも。

君が代は千代に八千代にさゞれ石の

いはほとなりて苔のむすまで(榮エマシマセ)

こぞの春ちりにし花も咲きにけり

あはれ別れのかゝらましければ(ウレシカルベキニ)

とあるを以て其一例を知るに足らん。是は言はずしてもそれと知らるゝ詞を略して。餘情を長からしむる方法なり。

其第三は歌に限る特例を用ふる事あり。たとへば文法上「こそ」の係は「けれ」し「けれ」と結ぶべき定格なるを。萬葉集の歌に。

野を廣み草こそしげき

また。

難波入あし火たく屋の蝶したれど



おのが妻こそこころめづらしき。

催馬樂に。

小芹こそちで、もうまし。

ふどある如く「きしき」にて結びたるは。歌の特例にて口調の都合に因るもの  
と知るべし。

また「こそ」の結ふらでは「ぬれ」つれ「けれ」「來れ」「給へれ」などは用ひぬ定格な  
るを。萬葉集の長歌に。

天づなふ人日さしぬれ云々

玉きはる命たえぬれ云々

いたづらに過しやりつれ云々

露霜の過ぎましにけれ云々

大雪のみなれて來れ云々

こがねありと奏し給へれ云々

ふどあるは。何れも「ぬれば」「つれば」「ければ」「來れば」「給へれば」と言ふべきは「  
文字を略したる特例あり。

古歌の嚴格ふるものにも。既に散文と違ひて特例を許したる此くの如し。未來  
の新體詩にも此かる特例の起らん事自然の勢ふるべし。然れども古體の和歌に  
も熟達し新體の詩歌にも老練なる人にして。始めて此特例をば設くべく。未だ  
其域に至らざる人の輕々しく手を出だすべき事には非ざるべし。さりとして或  
文法家の如く。歌に特例を設くる理は萬々無しとて。嚴重に之を攻撃する如き  
は亦惑へるの甚しきものゝみ。

(十) 題の附方



題はごうでも宜しかるべし。本文さへ優れたらばといふ人も有らん。然れども題は歌文の看板なり。入口には河童を畫がきて中には合羽を釣るし置く如き虚喝手段は必要ふけれど。賣物にはべにをさす類の愛嬌方便をば。用ひんこそ花の上に花を添ふるには在るべけれ。新體詩は美術の一なり。謂はゆる美術品ふるものは。畫にもせよ彫刻にもせよ。其目的とする物體の意匠と手際との外に。表装等の附屬物中些少の缺點をも見出たさば。其不愉快の感情は遂に及ぼして本體の美妙をも放棄せしむるに至らんも知るべからず。是れぞ完全無缺を要する美術の美術たる處ふるべき。題の歌文に於ける。抑も亦おろそかにすべからざるあり。

古人の用ひ來りし題の種類を別ては五つとなる。すなはち。

- (イ)漢文題
- (ロ)和文題
- (ハ)漢句題
- (ニ)和句題
- (ホ)名詞題

是なり。

(イ)漢文題………は。未だ平假名もて國語を記す事の始まらざりし上古に。變則の漢文もて彼詩題に擬し書きたるが例と爲り。後世までも長歌とさへいへば。萬葉集に擬して用ひしものなり。たとへば。

イ。感傷近江舊堵作歌。

ロ。從長門浦船出之夜仰觀月光作歌。

の類なり。既に我國語もてする新體詩に。今更平假名ふかりし時代の書方を用ふるに及ばぬは。火を見るよりも明かれば。これは新體詩の領分に犯入せしむまじきなり。

(ロ)和文題………は。平假名の便利おこりて以來。古今集以下の勅撰私撰歌集を始として。今日まで歌人の用ふるものなり。たとへば。

イ。春立ちける日よめる。



ロ。家にありける梅の花の散りけるをよめる。  
 ハ。隣より常夏の花を乞ひにおこせたりければ。をしてみて此歌をよみて  
 つかはしける。

などの如く。其歌よみたる時の實況を註しおく爲めに多く用ひたり。されば之  
 を「前がき」「端がき」「詞がき」「小序」など、稱ふ。

是は新體詩にも。實況を註しおくべき必要あらば用ふべしといへども。ふるた  
 け簡潔にして濟まさんこそ題の本意ふるべけれ。題の長々しきは實に嫌惡すべ  
 き感情を引き起すものなればふり。況んや名詞題にしても句題にしてもよきも  
 のに於てをや。

(ハ)漢句題………は。漢文題より出で、一種定式の歌題とふりたるものふり。  
 たごへば。

早春霞

春色浮水

花如雲

水鷄驚夢

馬上聞鹿

折紅葉

などの如く假名を交へずに書きたるをいふ。新體詩には用ふべき處ふきか如  
 し。

(三)和句題………は。和文題より出でたるものと。歌中の文句を抜き出だした  
 るものとの二つあり。和文題より出でたるものは。

イ。月きよし。

ロ。一夜風あれたり。

ハ。友を待つ。

ニ。旅ふる妹に。

ふどの類あり。是は用ふべし。

歌中の文句を抜き出だしたるものは。其はじめの文句または主眼たる文句な  
 どもを題にしたるを云ふ。是は古體和歌には餘り見ざれども。歌曲には常に用ふ  
 る事にて。謠曲中にも。

この音楽にひかれつゝ。聖人御代に又出で。云々。(難波)



といふ一段をば特に「この音楽」と稱へ。

千秋樂には民を撫て萬歳樂には命をのぶ。云々。(高砂)  
の一段をば「千秋樂」と稱ふるなどの例もあり。俗曲には。

嵯峨やお室の花ざかり。云々。

といふ唄を「さびや」と呼び

過ぎにし梅の花見月。云々。

の曲を「すぎにし」と呼ぶも有るのみならず。西洋の歌曲には此くの如き題を多く用ふるよりして。近來の唱歌には普通の事となりたれば。之を用ひん事もより妨ふし。たゞ口調よく記憶し易き語勢の句に非ずんば用ふまじきに注意すべし。

(ホ)名詞題………は。古今雅俗を問はず和漢洋を論せず。何種の歌人も常に用ふるものなるが。是に二つあり。たとへば。

春風	雲雀	ほたる	初雁
落葉	夕暮	山里	旅

ふどの如く、其歌中の主たるものを以てする。または源氏物語の卷の名。謠曲以下の歌曲の名の如く。主たる詞にはあらねど。其歌中にあらはれたる優美の名詞を取りて題にするとの別ある是なり。何れにしても用ふべきは異議なし。

(十一) 書式

歌の書式は書き下しにするのと別けて書くとの二様あり。書き下しにするとは。たとへば。

やすみし、わご大君の。かしこきや。御陵つかふる。山科の。鏡の山に。夜はも。夜のことごとく。晝はも。日のことごとく。音のみを。泣きつゝありてや。百



敷の。大宮人は。行き別れふむ。  
の如く散文と同一様の書方にするを云ふ。  
別けて書くとは。たとへば。

イ。やすみしゝ	わご大君の	かしこきや	御陵つかふる	山
科の	鏡の山に	夜はも	夜のことゝ	晝はも
ことゝ	音のみを	泣きつゝありてや	百しきの	大宮
人は	行きわかれなむ			
ロ。やすみしゝ	わご大君の	かしこきや	御陵つかふる	山科の鏡の
山に	夜はも夜のことゝ	晝はも日のことゝ	音のみを	
泣きつゝありてや	百敷の大宮人は	行きわかれふむ		
ハ。やすみしゝ	わご大君の	畏きや	御陵つかふる	
山科のかゝみの山に		夜はも夜のことゝ		

晝はも日のことゝ

百敷の大宮人は

音のみを泣きつゝありてや  
行きわかれなむ

の如く。句の間を切り又は句の頭を揃へて書くを云ふ。  
また短歌の下の句を下げて。

春立つといふばかりにや三吉野の

山も霞みて今朝は見ゆらん

など書く式に習ひ。

ニ。春の彌生のあけぼのに

四方の山邊を見わたせば

花ざかりかも白雲の

かゝらぬ峰こそ無かりけれ

など書くをも此内に敷ふべし。



さて以上さまゝの書式ある内。新體詩には何れをか撰ぶべきといふに。書き下しにするは。餘り冷淡なる取扱に似たれば好まゝからず。別けて書かんこそ。讀みよく體裁うつしく愛嬌ある方法なれば。最も撰ぶべきに似たり。其内にも二(春の彌生)の書式殊に衆望を得べきに近し。然れども句格の都合によりては。ハ(頭を揃へる)の式も然るべし。とにかく新體詩は美術なれば。書式にも注意して體面を優美にせんことこそ必要ふれ。

(十二) 讀法

詩歌は口調をこゝのへて誦ふべく吟すべく作りたるものふれば。之を讀むにも書簡文の如く受取證文の如く。抑揚ふき棒讀にすまじきは疑なかるべし。然らば如何に讀むべきといふに。之を定むるはずぬぶん困難の事なり。先づ百人一

首を讀む節にも種々ありて。

イ。あきのなの。かりほのいほの。とまをあらみ。

わがころでは。つやにぬれつゝい。

ロ。あきのなの。かりほのいほの。とまをあらみ。

わがころもでは。つやにぬれつゝ。

などを始めとし外に幾種もあるべければ。何れを標準とすべきか。頗る其方向に迷ふべし。然りて之を等閑に打ち捨て置かば。節を附けて朗讀するものは自分勝手の口調。謂はゆるチヨボクレ節ジャンジャカ節などの如く。聞くにも堪へぬものを製造し出ださん恐あり。又自分節をも製造する能はざるものは。黙して見るあるを知れども發聲して讀むあるを知らずして止みふん。是れ果して詩歌の本意たるべきか。然りて答ふるものは非ざるべし。彼支那流の詩人が詩句を考へつゝ有るを見よ。桃花ア水ウ暖にイしてエ輕舟をオ



送るウと。節を附け發聲しては口調を試み。また前句を吟じ味ふ内に後句を得る好方便あるに非ずや。新體詩にも亦この好方便を得ん事は希望すべき事あるべし。さて試みに新案として先づ第一着に議すべき讀法は。

イ。くさまくら。たびのうれひを。

ふぐさもることもあらんご。

ロ。かりがねも。さむくさふきぬ。

あきかせに。しらふみたちぬ。

ハ。けふもかも。めしたまはまし。

あすもかも。ごひたまはまし。

の如く。或は前句の終を上音にして後句の終を下音にするか。或は前を下音。後を上音にするか。又は前後とも下音にて終らしむるか。諸君は度々口ふらし試み。従つて他の文字をも上音下音に讀みためして。而して後まづ我自身の新體

詩讀法を定むべきにあり。こゝには五七調の例を示したれど。七五調にても其他何調にても同じ事なり。讀法定まりたらば。おのづから口調も其妙を得るに至るべし。ふほ此讀法をして普通の定格たらしむる事は。諸君の試みて用ひて而して後に在るべければ。先づ近きより始めざるべからず。

(十三) 結 論

讀者諸君は既に新體詩の來歴と其組織とを學び得たり。而して其目的と性質とは或は未だ明亮ならずと詰らるゝもあらん。抑も詩歌には外面に備へたる性質と内部に備へたる性質とありて。外面のものは。前に縷述せし如く制限ある字數句數を用ひて。長短不規則なる散文の字句と異なる點にあり。内部のものは最高最大の美妙を表はすこと。散文よりは比較上多數をしむる點にあり。



然れども。散文にも最高最大の美妙を表はもこと。詩歌と異らざるあり。又歌にも美妙の表はし方。はるかに散文より劣れるもあり。されば字句の数のみ規則だちたりとも。精神卑俗ふらば新體詩とは言はるべからず。また精神のみ美妙なりとて。字句の數不規則ならば。是また新體詩と言はるまじきものふりご知るべし。

最高最大の美妙を表はすは新體詩の目的にて。字句の數を揃へ音調を整ふる事は新體詩の方便ふるを知ると同時に。美妙とは如何なるものぞこの疑問起らん。美妙の定義と之を表はす方法とは。載せて前編の修辭學に在り。請ふ之を讀んで新體詩を作る目的を熟知せよ。

(十四) 參考室

正月六日はかり。よへの雪のふごり見んとて。隅田川に船をうかめて。

村 田 春 海

みなのぼる。隅田川原の。  
上つ瀬の。堤を見れば。  
また草の。みどりもわかず。  
春の日を。早く待ちえて。  
下つ瀬を。かへり見すれば。  
波の上に。友呼びかはし。  
夕虹の。たつかとはかり。  
かゝる中橋。

川船の。ゆくわた遠き。  
ふら雪に。ふほうづもれて。  
たちふらぶ。木々の梢は。  
うらくと。煙り初めたり。  
こほり居し。蘆邊の洲鳥。  
をちかたや。霞の間より。  
久方の。雲井にたかく。

消えせずはあすもこひこん墨田川

川とほろくふれる淡雪



(語釋)みそのぼる……水脈のぼるの意。○とはしろく……遠著くの意。

柳

簾こそ。編みては懸くれ。  
編まふくに。軒はにかり。  
簾なし。日かけをへだて。  
吾宿の。去なり柳は。  
まけをかもする。

僧

簾こそ。取りては拂へ。  
取らふくに。庭の面はらひ。  
簾なし。塵うちほらふ。  
みやび男の。友の訪ひこん。

辨

玉

(語釋)まけ……該の意。用意に同じ。

樵路春月

長閑ふる。春の山路に。  
夕月を。待ちてや暮れし。  
山がつか。聲すなり。

僧

咲く花を。見てや後れし。  
真柴たひ。歌ひつれくる。  
家路とめ。今かへるらし。

辨

玉

里さして。今かへるらし。  
山がつか。聲すなり。

真柴たひ。歌ひつれくる。

さき續く花もおぼろの月かけに

木こりが歌は霞まどりけり

野遊

あさみどり。霞む春日の。  
圓居して。いざ遊びふん。  
をりくは。岡邊の松に。  
いざこゝに。飲みて遊ばん。

石

井

義

郷

すまふ草。にほへる野邊に。  
ひばり鳴く。それだにあるを。  
うぐひすも。來ては鳴くなり。  
見つゝ聞きつゝ。

詠蝶

櫻花。にほふあたりに。  
とさの間。に。數々いでき。

石

井

義

郷

ひこつ見え。ふたつ顯はれ。  
うちむれて。むつるゝ蝶よ。



飛びわかれ。飛び集りて。  
たれも皆。見つゝ飽かぬを。  
櫻花。えだうちたゝき。  
飛びぞわがるゝ。

たはれつゝ。遊ぶこてふよ。  
面白ど。いひつゝあるを。  
風ふけば。またちりふに。

蝶や花はふやてふとも見ゆるかな

吹く春風にみだれ〜て

花處々

僧 辨 玉

花ぐほし。櫻さければ。  
人の家の。花も見がほり。  
鶯の。ひとくごごむ。  
子鴉の。いざあごさそふ。  
咲く花の。宿を訪はまし。

吾宿の。はふに人まち。  
けさも又。訪はんとすれば。  
けさもふほ。やめんとすれば。  
いざけふは。ふがゆくかたの。  
鶯に。わぎへのそのゝ。

花はまかせて。

(語釋) 花ぐほし……櫻の枕詞。○見がほり……見たく思ふの意。○ひとく……人來々々  
と鳴くよし古歌によみ習はしたれば云ふ。○なが……汝がにて鴉を指す。○わぎへ……戦  
家の意。

吉野川に花ちりてなぐる。

本 居 宣 長

みよし野の。山の櫻は。  
高ねにし。嵐ふくらし。  
みよし野の。山の櫻は。

たきの川瀬に。散りて流るも。  
川上に。あらしふくらし。  
たきの川瀬に。散りて流るも。

春 興

海 野 遊 翁

春の野は。道ぞゆかれぬ。  
初わらび。生ひまどりけり。  
行く先に。ひばり鳴きたち。

右ひだり。すみれ花咲き。  
すみれ草。つまんとすれば。  
初わらび。折らんとすれば。



来しあごに。鶯なきて。  
道ぞゆかれぬ。

春歌

梓弓。春の彌生は。  
吹く風も。袂にぬるみ。  
軒端には。燕を來ふく。  
朝日かけ。にほひうつくし。  
とりとくに。あらそひたてり。  
春にやはあらぬ。  
花鳥にけふもむつれてそこごとなく

裳裾かゝぐる春のこのごろ

(語釋)野づかさ……野の高き處を云ふ。

おもしろみ。聞きすてがたみ。

六人部是香

うらくしと。日影のどけく。  
雲井には。雁金かへり。  
あし引の。山の櫻は。  
野づかさの。莖蕨は。  
野に山に。ゆくてにあかぬ。

暮春

鶯は。ちる花よりも。  
咲く花は。ゆく春よりも。  
身をつみて。今ぞあらるゝ。  
ゆく春の。わかれ思へや。  
かねて散りけん。

首夏歌

庭のおもに。こだる楓は。  
軒近く。生ひなつ竹は。  
四方山は。青垣山と。  
野の邊には。青菜も麥も。  
軒端には。燕妻よび。

僧辨玉

早くより。鳴きてわびぬる。  
さきだちて。散りて過ぎにき。  
散る花の。うさを思へや。  
そこゆゑに。かねて鳴きけん。

六人部是香

このぐれに。みづえさしおほひ。  
さねぬぎて。百枝さしそひ。  
一ついろに。若葉に茂り。  
おしふへて。赤らみあへり。  
林には。貌馬來なく。



天の原。そらもうらゝに。  
いざ子ども。野山にまじり。  
手にや馴らさん。

國原は。煙ちたけし。  
赤玉。照れを覆盆子を。

若葉そふ木々のみづえのれびやかに

心ちたけき夏のこのごろ

(語釋)こたる……木垂の意。○このくれに……木の暗くなるを云ふ。○みづえ……茂り  
榮えたる枝。○國原……國の廣く見わたされたる處を云ふ。

首夏風

海野遊翁

折にふれ。めづるはこゝろ。  
心こそ。さだめもあらね。  
花ゆゑに。いとひし風を。  
吹きわたる。いろを涼しみ。

時につけ。かはるはこゝろ。  
彌生山。花咲くころは。  
夏たちて。茂りあへれば。  
めづらし。待ちこそむかへ。

そよぐわか葉に。

螢

空はまだ。暮れもあへぬに。  
生ひ茂る。蘆の葉がくれ。  
時のまに。暮れゆくまゝに。  
里の子の。おくれ先だち。  
とびちがふ。螢を狩ると。  
いりみだれ。亂れを遊ぶ。

海上夕立

和田の原。ふりさけみれば。  
汐ふわの。とままるかぎり。  
時のまた。空かきくれて。

海野遊翁

遠近の。川瀬の真菰。  
一つ見え。二つあらはれ。  
川瀬みな。螢にふれば。  
うちきほひ。きほひ出でて。  
笹葉もち。團扇手にもち。  
川へづなひに。

橋守部

白雲の。むかぶす極み。  
庭もよく。晴れたる海の。  
あげ汐を。おろしもあへず。



千す網を。たぐりもあへず。  
邊を見れば。鯨のいぶきか。  
ふる神か。くづれおちぬご。  
その雨の。見のおそろしき。  
白波を。沖にのこして。  
夕立の。空さりげなく。  
海のおもてを。

沖見れば。鯨の汐か。  
みそらには。龍か。いまく。  
その音の。聞きのかしこく。  
青海原。かせのふごりの。  
見し雲は。いづちいにけん。  
夕日影。た。い。さ。し。わ。た。る。

(語釋)むかふす……雲の地上に向ひ伏すの意にて天のはてを云ふ。○汐なわ……汐の泡の意。○庭……海上と云ふ。○いぶき……息吹の意。○いまく……巻くといふに同じ。龍巻の事。

船中納涼

夏の日の。あつさいとひて。

暮まちて。舟乗りすれば。

僧 辨 玉

さしそはる。潮もかふひて。  
吹く風に。暑さは消えぬ。  
夕月も。かけすみぬらん。  
よる波の。影のよろしも。  
入日さすあり。

うちよする。波もしづけく。  
ゆく水に。夏はふがれぬ。  
満つ潮の。さしてすままん。  
川上の。豊旗雲に。

(語釋)かひひて……満潮になるを云ふ。○豊旗雲……夕日の空に旗の如く美しく捲引く雲と云ふ。

夏の歌

藤 原 土 満

山ちかく。家居しをれば。  
ゆふべには。見さくる山。  
あしたより。いや立ち榮え。  
夕べより。しむにふりゆく。

あしたには。みわたす山。  
あした見て。夕べに見れば。  
夕べみて。あしたに見れば。  
夏山の。まげき木のまに。



ほととぎす。來鳴きこよもす。

その青山に。

(語釋)見さくる……ながめやる事。○とよもす……あたりを響かす事。

立 秋

海 野 遊 翁

蓬生は。いつとわかぬど。

秋の來る。今日の夕べよ。

ふとてかく。淋しかるらん。

穂にいでぬ。籬のすゝき。

露おかぬ。苔のかよひぢ。

見る毎に。あはれぞまさる。

秋の來るより。

田 家 虫

海 野 遊 翁

あせづたひ。つたふ細道。

くるづたひ。過ぐる通路。

むらくに。薄穂にいで。

淋しきは。門田の秋ぞ。

ふづけきは。田中の庵ぞ。

たえらくに。薄霧なびき。

やゝゝに。暮れわたるころ。

垣根にも。くろにも虫の。

遠近に。やゝあきたてゝ。

白露の。おくての稻の。

ほのゝと霧ににほへる。

月かけの。さやかに聲の。

ふりもゆくかな。

くれはてゝ。月にふりゆく小山田は

虫の聲さへすみわたりけり

八月もちの夜。芳宜園にて月をみて。

村 田 春 海

秋の夜の。いつはあれども。

今宵こそ。たぐひあきよと。

昔より。人もいひつけ。

てる月の。いつこはあれど。

秋萩の。花ににほへる。

白露に。うつろふかけは。

大かたの。世に似ぬ宿と。

もろごもに。手携はりて。

月見よと。人もとひ來ぬ。

花見にと。我もおりぬて。



からころも。紐解きさけて。  
あけすもあらふん。

うらもふく。遊ぶ此夜は。

この園にはほふまはぎのからにしき

たつこことやすき月の夜半かは

(語釋) からころも紐解きさけて……古代の唐衣は紐もて結びしなれば。その紐をも解きて心をゆるし遊ぶ事。今ならば羽織も袴もぬぎすてと云ふ程の意。

八月十五夜くもりけるに。

村 田 春 郷

まそかみみ。照るべき月を。

白雲か。おほひかくせる。

天つ霧。立ちか隔つる。

ふしゑやし。雲はたつとも。

ふしゑやし。霧は分くとも。

うからやから。つごへる今宵。

月のおそびせん。

(語釋) よしゑやし……よしやと云ふに同じ。○うからやから……家族親族を云ふ。

八月十五日夜雨いみどうふりければよめる。

加 藤 千 蔭

月たちて。まだ三日月の。

西山に。ほのめきしより。

いつしかご。待ちこししものを。

名におへる。なかばの秋の。

望の夜の。あたら此夜を。

久方の。天雲おほひ。

風まどり。雨降りすさび。

さきにほふ。本荒の小萩。

こゝろふく。志をりに志をり。

花をさへ。こき散らしけり。

ことふらは。天の八重雲。

吹きはらひ。月の面輪を。

世の人の。こゝろ足らひに。

見せんよしもが。

萩の花のうつろふのみか此夜らの

名をさへ雨に朽たしはてつゝ

(語釋) ことふらは……相成る事ならと云ふ程の意。○心足らひに……満足すべくの意。



紅葉

僧 辨 玉

露霜に。染めて色こく。  
つひに吹く。風や散らさん。  
手をらんと。陰にはよれど。  
後に來ん。人やうらみん。  
たやたひて。とりてはをしみ。

秋山に。ほへる紅葉。  
散らすらん。つらさ思へば。  
たわめんこ。下枝は取れど。  
恨むらん。ふげき思へば。  
おきてはをしむ。

凌雲院にまかりける時。前栽の菊を見て。

海 野 遊 翁

香をとめて。誰とほざらん。  
庭もせに。このもかのもとに。  
いつしかと。待ちけん君よ。  
いかにこは。樂しがるらん。

花見つゝ。誰めでざらん。  
菊といふ。菊をうゑふべ。  
いかにかり。うれしがるらん。  
やゝくは。綻びそめて。

あろたへに。から紅に。

さまとくに。ほふ此菊。

長月の。長き盛を。

明暮に。みるも飽かど。

にほふこの菊。

冬 歌

六 人 部 是 香

水鳥の。鴨川堤。  
川瀬には。千鳥志ばなき。  
大比叡や。小比叡の山は。  
大原や。小野の山ふみ。  
棚橋を。わたらふはしに。  
あし引の。北山おろし。  
あわ雪の。みだれて來れ。  
並み立てる。松だにみえず。

朝霜を。踏み分けやけば。  
田面には。たづがね寒し。  
ふる雪に。尾上ましろに。  
炭竈の。煙ぞくろき。  
久方の。空かき曇り。  
衣手に。志まきわたれば。  
かみふびの。森もいがくれ。  
玉ほこの。道やきかねつ。



いかにしてまし。

うちはらふみぎりひだりの衣手も

ふほ白雪のふりおもりつゝ

(語釋)わたらふはしに……渡る間にの意。○玉鉾の……道の枕詞。

薄暮松風

石井義郷

にはかにも。ふり来る雨と。

驚きて。出でし見れば。

雨降ると。きくは松風。

曇りぬと。みしは夕暮。

いつしかと。木のまに月の。

ひかりかやく。

今日も又風ふく松にはかられて

ふりくるあめと思ひけるかな

詠真孀山歌

加納諸平

此山日高郡の高山にして。丹生津比賣大神の天降りまし、山といひ傳ふ。

丹生告門に江川の丹生に忌杖刺給ふと見えたる時の事どもおもひよせて。

郷長瀬見善水にあたへたる歌あり。

かけまくも。かしこけれども。

丹生津姫。かみのみこと。

韓國を。ことむけまして。

朝もよし。紀の此國に。

いみ杖を。刺させ給へる。

宮處。さほにあれども。

日高のや。江川の丹生は。

谷川の。清き瀬の音と。

御心を。よせ給へばか。

里々に。こゝだ祭れる。

けだしくも。故かもあると。

里長に。わが問ひきけば。

里長の。われに語らく。

いにしへの。事は忘れど。

天飛ぶや。鶯のつばさに。

その神の。乗らし給ひて。

かの見ゆる。いづの高山。

はしづまの。まつまの山に。

くすまも。天降りまし、や。

つがの木の。つぎてもろく。



いつくごし。き、傳へぬと。

真婦はや。はしき山かも。

男さび。巖な、ふみ。

をこめさび。秋萩しふひ。

古も。まかにあれこそ。

くすまくも。天降りましけめ。

かつぐも。吾に語りき。

青雲に。そばだつ峰は。

よらのぼる。麓の小野は。

朝よひに。見がほし山ぞ。

こそむけし。神のみことの。

はしき神山。

(語釋)ことむけ……征服する事。○朝もよし……紀伊の枕詞。○いみ杖……清浄なる杖

の意。神の御杖なれば云ふ。○さはに……多くの意。○いづの……清浄の意。○はしづまの

……愛らしき妻の意。まつまの序詞なり。○天降……あもりと讀む。○つがの木……繼

ぎての枕詞。○いつく……祭るの意。○たゝなみ……疊まり重なるを云ふ。

竹をめぐる歌。

我園に。うつしうゑなる。

中 島 廣 足

いくみ竹。よ竹。

年のはに。根はひほびこり。

いや高く。おひたち榮え。

風ふけば。音もさやく。

朝よひに。見の乏しもよ。

琴にも。つくりてひかん。

おむかしき竹の。

夏まけて。生ふるたかむな。

いや茂く。枝さしそはり。

雨降れば。露もさを、に。

かくのごと。榮はえやかは。

笛にも。つくりてふかん。

いくみ竹。よ竹。

(語釋)いくみ竹よ竹……竹の美稱。○年のは……年毎に同じ。○ほびこり……はびこり

に同じ。○たかむな……等之事。○見の乏しもよ……見て愛する事。

詠茶歌

山城の。宇治のわたりは。

川がらし。さやけかるらし。

うゑおほす。春の木をめ。

中 島 廣 足

山がらし。貴かるらし。

もろこしの。種を傳へて。

こゝをしも。國のまほらと。



世々をへて。しみ禁えつゝ。  
たぐひなき。名にこそおへれ。  
いひつぎし。昔の人は。  
かくばかり。尊き木のめ。  
玉ほこの。里もといろに。

天の下。四方にたゝへて。  
世の中の。うちのわたりと。  
かけてしも。おもはざりけん。  
年毎の。春のさかりに。  
つみ出でんとは。

(語釋)山がら……山がらに因りての意。○國のまほら……國の中央といふに同じ。○たゝへて……稱美する事。○世の中のうぢのわたり……世を宇治山といふなりの意を引きて云ふ。世を憂く思ふを宇治にいひかけたるなり。○玉ほこの……こゝにては里の枕詞。

鶴雲井にあそぶ。

海野遊翁

朝まだき。みどりの空に。  
白鶴の。二むら三むら。  
なきつれて。むれ渡り來て。

白雲の。なびくこみれば。  
まなづるの。四むら五むら。  
大空を。かふたこふたへ。

ゆきめぐり。めぐり遊びて。  
真鶴の。ゆきむさなりて。  
つぎ〜に。雲井はるかに。  
ふきかはしむれゆくたづは大空に

白鶴の。ふきつれ行けば。  
なきかはし。跡より跡に。  
ふりにけるかな。

千代をかされて見するふりけり

童子

黒澤翁磨

物見るに。さほる目ざしの。  
額髪の。垂るゝ年へて。  
手に持てば。二つは取らず。  
うれしげに。笑ひもしつゝ。  
おもえろく。遊び狂ひて。  
君と思ひ。悲しきものは。

かきもやらず。うち傾きて。  
みつぐりの。中の一つを。  
悲しげに。なくかこみれば。  
何事を。思ふともふく。  
世の中に。かしこきものは。  
父母の。ほかにありとも。



思ほえぬ。わらはうつくし。  
又もふりてしが。

我もその童ごころに。

(語釋)目ざし……童子の髪のおび下りて目を刺す程の年齢を云ふ。○みつぐり……中の枕詞なると。乘三つの意にかけて云ふ。

美人對鏡

間 宮 永 好

ます鏡。とりふべかけて。  
みなのをた。か黒き髪を。  
望月の。足れるおもわに。  
山櫻。笑めるが如く。  
とりよろひ。居らくを見れば。  
地よりか。あれ出でにけん。  
國家も。何にかはせん。

腰細の。すがる少女が。  
かきけづり。たぎて来ねて。  
白きもの。かきにはほはして。  
青柳。もゆるが如く。  
天よりか。くだり來にけん。  
はしきやし。妹がためには。  
わぎのちも。惜しくはあらずと。

こゝだくの。人ぞ思はん。  
まかはあれど。此年の緒は。  
とりつなぐ。物にあらねば。  
やゝくゝに。にほひ移ろひ。  
顔には。波ぞよりふん。  
大舟の。思ひたのみて。  
はふらすなやめ。

我もまた。まかこそ思へ。  
梓弓。矢よりもはやく。  
さばかりの。花の姿も。  
かしらには。雪ぞふりなん。  
さしむかふ。鏡のかけを。  
末つひに。よるべふき身と。

(語釋)とりなべ……取り弁への意。○すがる少女……美人の形容。すがるは腰細さ鹿の名なりとも云ふ。○みなのわた……港といふ貝の腸は黒き物なれば。黒きの枕詞に用ひたり。○たぎて……たくしあぐる事。○望月の……足れるの枕詞。顔の形容をも兼ねたり。○はしきやし……愛らしきの意。○わぎのち……我命の意。○大舟……思ひたのむの枕詞。○はふらすな……零落さする勿れの意。



王昭君

咲く花の。にほへる毎に。  
 われこそは。顔よき少女。  
 宮づかへ。つかへし時は。  
 誇らしく。思ひし我身。  
 あくる日は。君にふらびぬ。  
 睦びつゝ。あらましものを。  
 すみなれし。都を出で。  
 見ず知らぬ。荒きえびすが。  
 我こそは。かなしき女。  
 晝はたゞ。恨みにしづみ。  
 月見れば。都こひしく。

石井 義 卿

照る月の。てらすが如く。  
 われにます。人はあらど。  
 うち笑みて。ありこし此身。  
 暮るゝ夜は。君に添ひふし。  
 明暮に。思ふことさく。  
 榮えつゝ。經ふましものを。  
 言だにも。通はぬ國の。  
 その人の。妻さふれはば。  
 我にます。うきはあらど。  
 夜はたゞ。歎きにふかし。  
 花見れば。涙こぼれて。

あけくれは。思ひを盡きぬ。

ねてもさめても。

もの思ひあらぬ我身こそひしや

たえぬふげきのはじめふりけん

いまゞては物は思は下たまほこの

道の空にて消えなましかば

漁舟を見てよめる。

中 島 廣 足

朝しほの。みちのこゝみに。

あともひて。こぎつらふべて。

拷繩の。千ひろ打ちはへ。

夕しほの。なぎたる浪に。

よびたてゝ。あごとゝのへて。

はりわたす。網のやちひろ。

やゝしに。ひきよせあけて。

とりえたる。さはなひろはた。

舟ごごに。積み足らはして。

漕きさほひ。かへらふ海人の。

ほこらしげなる。



(語釋)とつみ……さわぎと云ふ程の意。○あともひて……誘ひつれての意。○打ちはへ……延ばして海に入る事。○あご……網子の意。○さはたひろはた……狹鱗廣鱗にて大  
小の魚を云ふ。

看蒸氣車走鐵道偶爾作歌

僧 辨 玉

久堅の空のどけきを。  
龍神か。いまきのぼれる。  
ふりひゞき。音を轟く。  
その音は。車の響き。  
つらなれる。屋形のうちに。  
敷きわたす。くろがねの道。

ふる神か。くづれおちくる。  
かきくらし。雲ぞ起れる。  
その雲は。たく火の煙。  
たちどまり。見る間もあらず。  
こゝばくの。人つごへ乗せ。  
走りてすぎぬ。

(語釋)くろがねの道……鐵道の意。

伊勢山招魂祭碑之歌

僧 辨 玉

隼人の。さつまの國の。  
壯夫の。功たゝへて。  
磯邊には。波の音とよみ。  
ありしよに。挑みたゝかひ。  
木留の。とまらずすゝみ。  
木がらしと。うち散らしけん。  
その聲を。風もたつるか。  
われだにも。心さまねし。

ことむけに。いぬちすぐとふ。  
石ぶみに。いむかひをれば。  
山へには。松風さわぐ。  
田原坂。さゝふを崩し。  
木の葉村。むらしく冠を。  
その音を。波もよするか。  
見も去らず。言もかはさぬ。  
そこし思へば。

(語釋)隼人の……薩摩の枕詞。○いぬち……命に同じ。○いむかひ……向ひに同じ。○心  
さまねし……心に悲しく感ずる事。

秋の七草の繪によみて書きける歌

中 島 廣 足

いにしへの。みやび少女の。

春をおきて。心をよせし。



秋山の紅葉はあれど。

おきわたす露もさを々に。

ふつかしき色にしかめや。

くさくさにほふ中にも。

秋風に袖ふる尾花。

ふでしこの盛久しく。

ぬぎかけし人しのはしき。

朝顔のよみのまゆさへ。

秋野ぞ我は。

(語釋)とを々に……たわむほどの意。

述懐

父母のたまへる此身。

朝霧のはれゆく野邊に。

咲きにほふ千草の花の。

いろくに咲ける中にも。

さをしかの妻どふ小菼。

葛花の玉まくかづら。

女郎花。ふまめき立ちて。

藤袴。あかねにほひに。

開けたる。そこし面白し。

黒澤翁磨

うしごいひて。何か恨みん。

大君の。しらせる此世。

むらぎもの。我心ゆる。

玉の緒の。ふがくはあらぬ。

おほには有り經。

(語釋)しらせる……知しめすに同じ。○おほには……等閑にはの意。

難波より東に下れりける時に。大井川の水にさへられて。金谷の宿に

又しうありける時によめる。

黒澤翁磨

武士は。まけのまに。

まつりごつ。事はしげ。

年のはに。行きかへらへば。

花になれ。紅葉になれて。

故郷の。門出しよりは。

月重ね。年も經ねれば。

別れをば。をしごいひけり。

あしがちる。難波の人も。

つかさどる。事は多けど。

かもかくも。君が御爲ど。



歸るをば。待つといふふり。  
久方の。あまづゝみして。  
まけながく。うらふれをれど。  
難波津に。ふほやはあると。  
故郷に。今やいたると。  
行きもやらず。歸りもやらず。  
わびしきものを。

我はもや。草のまくらに。  
をどつひも。昨日も今日も。  
千はやぶる。神ふらぬ身は。  
故郷の。人やうらみん。  
難波津の。人やしのばん。  
みつぐりの。中空にして。

(語釋)まけ……任の文字なり。○まつりごつ……政をする事。○しげ……繁けれど  
に同じ。○あまづゝみ……雨に降りこめらるゝ事。○うらふれ……さびしくする事。

橘永世が屋を高くつくりて。其みゆるさまをよみてよここひけるに。

加 茂 真 淵

東なる。遠のみかどに。

百千里。家はあれども。

とりによるふ。山は見ゆれど。  
宿ながら。朝夕見つゝ。  
とりによるふ。家にもあるか。  
常夏に。めづらしきかも。

天の原。ふトの高ねを。  
もゝちなる。心はしりぬ。  
もゝちなる。時は行けども。  
富士の白雪。

(語釋)遠のみかど……遠所にありて朝廷の御代理に政事を執る官廳を云ふ。こゝは江戸幕  
府の事。○もゝちなる……百千足の意に用ひたり。○とりによるふ……具備せしと云ふ。○  
常夏に……夏と透しての意。

志摩の國なる鳥羽の嶺に登りてよめる。

村 田 春 郷

くしろつく。答志の崎の。  
一つ立つ。鳥羽の小峰に。  
かげごもの。坂手菅島。

まそわかみ。清き浦わに。  
登りたち。ふりさけ見れば。  
たふすゑに。摘みもしつへく。



青波に。浮びふらべり。  
 そともふる。白浪のへに。  
 参河の。いらごが崎は。  
 霞ふす。遠くぞ見ゆる。  
 此浦に。うべも船よす。  
 島清み。見れどもあかず。  
 我友は。こどもつたへよ。  
 沖つ舟人。

こまつるぎ。わく島山は。  
 か青にぞ。山並み立てる。  
 神島の。荒浪の間也。  
 やしま國。百船人の。  
 此山に。うべも風もる。  
 家人に。みせましものを。  
 鳥がなく。東にくなる。

やしま國も、船人のふねよする

こはの浦わはみれどあかぬかも

(語釋)くしろつく……答志の枕詞。○かげとま……南を云ふ。○こまつるぎ……わく島  
 の枕詞。○ろとも……北を云ふ。○荒浪の間也……荒浪の間よりの意。○風もる……舟と

泊して風間を待つ事

僧祐達論旨まうしに都にのほるを送る。

加 茂 真 淵

東より。春こそ立てれ。  
 その春に。君さそはれて。  
 おのづから。御法の花の。  
 春の日も。限りこそあれ。  
 常盤なす。御法の花の。  
 つゝみもて。霞の袖の。  
 世の人のため。  
 東より春に。こもふゆくへこそ

都へに。花こそ咲けれ。  
 その花の。都にゆくや。  
 聞くべき。春ふりけらし。  
 さく花も。うつろふものを。  
 すゑなくも。絶えぬ聲りを。  
 たち歸り。はやおほはなん。

のりの花さく都ふりけれ



青木美行が越の道の口に行くを送る歌。加 茂 真 淵

霞たつ。あづまの比叡の。

秋の水。隅田川原に。

水無月の。てる日の空も。

ちぎりたる。事ごしいへば。

川舟の。浮へるごこく。

山櫻。かぐはしみあす。

うるはしき。此友がきの。

坂もこえ。海も渡りて。

てる日にも。さゆる雪にも。

頼めども。歸りこむ間の。

春山に。花もにほはず。

花さけば。袂ふりはへ。

月みれば。小舟を浮べ。

冬ごもり。み雪ふる日も。

さはらへず。行きかひしつゝ。

このへには。たはれもすれど。

うちへはも。まことありけり。

みちのくち。さかひの國に。

はるくゝに。別れゆくかも。

さはらへぬ。常の契りを。

をりふしを。いかに過さん。

秋の水に。月の浮ばぬ。

心地して。遊びの道は。

さびしからまし。

(語釋)あづまの比叡……東叡山を云ふ。東京の上野の事。○どのへ……外面の意。○うち

べ……内心を云ふ。○みちのくち……越のみちのくちは越前の事。

幸和が一めぐりの忌に。去年をしのぶあまりに。

海 野 遊 翁

うつゝも。えぞ思ほえぬ。

明暮に。思へど思ひ。

面影の。目にし絶えねば。

さもすれば。かたへに有りて。

物いひて。あみし其さま。

いける世のごと。

堪へわびて稱ふる御名のかすくゝに



こぼるゝものは涙ふりけり  
花月院の御一周忌に。去年を戀ひ奉りて。

石井義郷

敷島の歌のしるべと。  
思へりし。海野の君は。  
ひとくくのいひおこすれば。  
一度は。ゆめかと思ひ。  
悲しみし。月日うつりて。  
一年と。はやなりぬるを。  
うつゝとは。思ひぞあへぬ。  
去年までは。絶えず來つるを。  
玉章の。たよりもふくて。

たのめりし。ひたやの翁。  
亡き人に。ならせ給ふと。  
おどろかれ。心まどひて。  
一度は。うつゝとふげき。  
春といひ。秋と暮れゆき。  
今も猶。ゆめと思はれ。  
しかれども。君の玉章。  
聞き見て。うれしかりしを。  
今日まで。に。過ぐる思へば。

あはれげに。君は亡き人。  
やゝくくに。知らるゝまゝに。  
いとしく。袖こそぬるれ。

安田休圃新室賀歌

船よする。五百の港の。  
高きやに。登りて見れば。  
小豆島。いや二ふらび。  
百世にも。替らぬしとし。  
松が島。名もごごとはに。  
沖つ波。ゆたに富みつゝ。  
ありかすに。うからやからも。  
御心を。安田のむらじ。

世の中に。常なき物と。  
別れにし。其をりよりも。  
涙こぼれて。

荒木田久老

堀川の。川邊の宿の。  
海原に。有り並み立てる。  
老人の。女男のちぎりの。  
家島の。うごかず缺けず。  
千年にも。榮ゆるためし。  
へつ波の。よするさゞれ石。  
うまはりて。來入りつごはん。  
新室ほぎする。



(語釋)うまはりて……生まれ添ふ事。○御心と……心を安くするの意に云ひかけたり。

弘化二年二月廿八日。こたび新たに造らせたまへる大城の御殿に移らせ給ふをほぎ奉りてよめる。

海野遊翁

國々の山といふ山。  
石をさへ。切りに切りわたし。  
天の下。千萬人の。  
暮れゆけば。大城をくだり。  
土はこび。土おきふらし。  
エらは。きほひのしり。  
おのがど。木を切りけづり。  
なやみふく。急ぎに急ぎ。  
みがきなす。其大御殿。

はやしてふ林をつくし。  
船路より。ちちより運び。  
明けたてば。大城へのほり。  
明暮に。いこふ事ふく。  
石みがき。石すゑ渡し。  
おのがど。むなぎ組み立て。  
墨繩の。たい一すぢに。  
建て渡し。その大殿。  
きさらぎの。末の八日を。

此月の。吉き日と定め。  
一年も。いまだ経ふくに。  
我君の。移るひますを。

(語釋)おのがど……銘々それ／＼にの意。

四十になりける年よめる。

下河邊長流

あはれ我。二人の親の。  
五月暗。物のあやめも。  
鶯の。ふりよりもふほ。  
ならちめの。其かふしびは。  
うつたへに。我をひたすど。  
床の上に。夜はごりふで。  
抱きもち。はぐまれにし。

思ひ子と。生まれし時は。  
まだ知らぬ。むつきの内に。  
いぶせくて。有りけんほどに。  
大海の。深き思ひの。  
膝の上に。晝はかきなで。  
あらし風。露にもあてど。  
袖の下に。三年もふれば。



みどり子の片ぬざりして。  
 千鳥足。やど踏みかため。  
 梓弓。八年といふに。  
 蘇命路の。山とし深く。  
 大丈夫の。道習はずと。  
 竹馬に。手づから切りて。  
 門の前。むちうち出だし。  
 招き集め。友むらゝに。  
 タされば。門邊に騒ぎ。  
 しのみめの。明くる待ちかね。  
 小弓取り。玉うちふらし。  
 雲雀ふく。頃にもふれば。

ともすれば。物にさりたち。  
 いつしかに。人と成されて。  
 ならちをの。其あはれびは。  
 行末の。名をさへ兼ねて。  
 家の園に。生ふる異竹。  
 手綱つけ。我をすゝめて。  
 方々の。あげまき童。  
 あしたには。大路にごよみ。  
 新玉の。春の立つ日は。  
 門松の。暗きに起きて。  
 行く人の。道をさまたげ。  
 春駒の。野をふつかしみ。

浅茅生の。つばふ抜きにと。  
 家々の。軒端たづねて。  
 郭公。来ふく五月は。  
 武士の。木太刀ざりはき。  
 うなぬ子の。石なつぶての。  
 水無月の。照る日盛は。  
 恐ろしき。底ともいはず。  
 おりのぼり。玉藻に遊ぶ。  
 水にのみ。なづさふほどに。  
 外山には。山雀わたり。  
 鴟鳴く。人し告ぐれば。  
 長月の。青ついららに。

朝な。出でぬ日もなく。  
 雀子の。かきりをさぐり。  
 菖蒲草。かざしにさして。  
 行く道に。敵むかへて。  
 勝負を。いごみ争ひ。  
 かげろふの。岩垣淵の。  
 早龍の。流れにそひて。  
 いろくづの。数せめとる。  
 秋の風。涼しく吹きて。  
 岡邊には。櫓の立枝に。  
 おのが時。今ぞ来ぬると。  
 をどり入れ。柴の立枝。



籠の枝に。もち引きかけて。  
 足引の。山を住家と。  
 遅き日は。母のこゝろは。  
 木枯の。膚とほすと。  
 我どちの。うふぬ子どもは。  
 若しとも。思ひ知らねば。  
 小山田の。荒田のくろの。  
 となみ張り。かゝる遊びの。  
 身を任せ。ありつる時は。  
 知らざりき。かくて年月。  
 明けくらし。ありへし物を。  
 初めとも。思ひ知れとや。

朝露を。分けそほちつゝ。  
 ありくらし。歸る夕べの。  
 騒ぎけん。時雨やふり。  
 老人は。わふく時も。  
 霜雪に。うるむ手足を。  
 朝川の。氷ふみわけ。  
 藪ひくれ。通ふ小鳥の。  
 たはわざ。行方もあらね。  
 世の中の。憂きてふ事は。  
 古郷に。思ふ事なく。  
 空蟬の。世の悲しさの。  
 老いらくの。父のよはひの。

七十の。ふけ行く秋の。

敷妙の。枕あがらず。

朝雲に。なふびき行けば。

しるしふき。さらぬ別れの。

とゞまりぬ。其藤衣。

とりつゞき。怪しかりしは。

あなご山。もぎ木の枝の。

落しけん。我はらからの。

白波の。跡なき船か。

夕かげに。かげろふ虫か。

行く方も。見えすしなれば。

わびしきも。我身一つと。

風をいたみ。假にうちふし。

見るまゝの。夢としふりて。

戀ひしたひ。歎けご今は。

道芝の。露のみ袖に。

今しはご。乾しもあへぬに。

身の上に。何の報いの。

ほろくご。もろき命を。

はかなさを。何にたごへん。

大空に。めわなる鳥か。

時のまに。昏消え失せて。

世の中の。憂きもつらきも。

なりにけり。猶陰たのむ。



はゞぞ山。千代もど仰ぎて。  
 つもり来し。よはひの末の。  
 猶ふわき。玉の緒絶えて。  
 悲しさは。ありしにいくら。  
 飽かずのみ。思ひめぐまれ。  
 世の中に。あるにもあらじ。  
 麻衣。うつふしぞめに。  
 跡をだに。とはんと思ひし。  
 身の癖と。とげすなりにし。  
 くやしけれ。何と鳴尾の。  
 一人して。世に立てるべき。  
 中空に。とあきかくゆき。

仕へしも。かゝる歎きの。  
 なつか杖。助くどすれど。  
 行く水の。また歸りこね。  
 まさるらん。こゝらの年を。  
 今更に。おくれては我。  
 うは玉の。黒髪おろし。  
 やつしても。亡き人々の。  
 心ざし。もどよりにぶき。  
 心こそ。わが心から。  
 浦に生ふる。濱松が枝の。  
 すべしなく。身を浮雲の。  
 迷ひつゝ。立ちよる山は。

風早み。木の葉ちりはて。  
 ふかりけれ。かくはあれども。  
 後瀬山。後せまつとて。  
 いたづらに。捨てもえやらで。  
 新玉の。四十の春に。  
 竹馬にふたゝび道をまかせても

わび人の。頼む陰こそ。  
 我よはひ。まだ若狭路の。  
 かゝる身を。千引の石の。  
 けふと。ありふるまゝに。  
 あひみつるかな。

雪ふるさどに歸る世もがふ

(語釋)うつたへ……ひたすらにの意に用ひたる如し。○ひたす……養育する事。○梓弓……  
 ……矢と云ひかけて八の枕詞とす。○蘇命路……須彌山に有りて云ふ想像界の山の名。○あ  
 げまき……童を云ふ。○かけろよの……岩垣淵の枕詞。岩垣淵は岩にて垣の如く取り圍み  
 たる淵と云ふ。○いろくづ……魚の事。○とどり……鳥を捕らんとて誘ひ寄する爲めに置  
 く罌の鳥を云ふ。○わがどち……我々同士の意。○となみ……鳥網の意。○たはわざ……



戯業の意。○空輝の……世の枕詞。○藤衣……喪服を云ふ。○今しはと……今はと云ふ  
に同じ。○もぎ木……枝をもぎ取りたる木と云ふ。○めわたる……さわたるの誤にや。

景 清(謡曲。以下も同じ)

作 者 不 詳

いで其頃は。壽永三年。  
平家は舟。源氏は陸。  
互に勝負を。決せんと欲す。  
きよねん。播磨の室山。  
ひよどりごえに。至るまで。  
ひとへに義経が。謀。  
いかにもして。九郎を討たん。  
のたまへば。

三月下旬の事ふりしに。  
兩陣を。海岸に張つて。  
能登の守教経。のたまふやう。  
備中の。水島。  
一度も味方の。利ふかつし事。  
いみじきに。よつてなり。  
謀こそ。有らまほしけれと。  
景清こゝろに。思ふやう。

判官ふれば。とて。  
命を捨てば。易かりなんと思ひ。  
陸に上れば。源氏のつはもの。  
景清。これを見て。  
打物。ひらめかいて。  
又向いたる。つはものは。  
のがさどと。  
源平。ながひに。  
一人を。とめん事は。  
小脇に。かいこんで。  
悪七兵衛。景清と。  
手取にせんとして。追うてゆく。

鬼神にても。有らばこそ。  
教経に最期の。暇乞ひ。  
餘すまじとて。かけ向ふ。  
物々しやと。夕日影に。  
切つてかゝれば。こらへずして。  
四方へばつこそ。にげにける。  
さもしや。かたふよ。  
見る目も。耻づかし。  
案の打物。  
何がしは。平家の侍。  
名のりかけ。名のりかけ。  
美尾の屋が。着なりける。



胃のしころを。  
 二三度にけのびなれども。  
 飛びかゝり。胃をねつとり。  
 鍛は切れて。こなたに留まれば。  
 遙にへだて。立ちかへり。  
 腕の強きと。いひければ。  
 頸の骨こそ。強けれと。

室君

室の海。  
 月の御舟に。棹さして。  
 梅が香の。  
 出で舟も。心ひく。

さりはづし。さりはづし。  
 思ふ敵ふれば。のがさふと。  
 えいやと。引くほどに。  
 主は先へ。にげのびぬ。  
 さるにても。汝。恐るしや。  
 景清は。美尾の屋が。  
 笑ひて。左右への。きにける。

作者 不詳

波ものどけき。春の夜の。  
 霞む空は。面白やふ。  
 磯山遠く。にほふ夜は。  
 花ぞ綱手。ふりける。

此花ぞ綱手。ふりける。

蟬丸

花の都を。立ち出で。  
 末白川を。うちわたり。  
 今は誰をか。松坂や。  
 あとにふるや。音羽山の。  
 松虫鈴虫。きりくすの。  
 里人も。とがむふよ。  
 清龍川と。知るべし。  
 關の清水に。影見えて。  
 駒のあやみも。近づくか。  
 我ながら。あさましや。

作者 不詳

うきねに鳴くか。鴨川や。  
 粟田口にも。着きしかば。  
 關のこふたご。思ひしに。  
 名残をしの。都や。  
 鳴くや。夕陰の。山科の。  
 狂女なれど。こゝろは。  
 逢坂の。  
 今や牽くらん。望月の。  
 水も走井の。影見れば。  
 髪はおどろを。いたなき。



眉墨も亂れ、黒みて。  
水をかゞみど。夕波の。

八島

月の出潮の。沖つ波  
海士の呼聲。里ちかし。  
た。一帆の。風に任す。  
月のちくへに。立ち消えて。  
影は縁に。うつろひて。  
筑紫の海にや。續くらん。  
海士の家居も。數々に。  
霞みわたりて。沖ちくや。  
見えて残る。夕まぐれ。

げに逆髪の。影うつる。  
うつゝふの。我姿や。

作者 不詳

霞の小舟。こがれきて。  
一葉萬里の。舟の路。  
夕への空の。雲の波。  
霞に浮ぶ。松原の。  
海岸そごとも。志らぬひの。  
こゝは八島の。浦傳ひ。  
鉤のいとまも。波の上。  
海士の小舟の。ほのくゝと。  
浦風までも。のどかふる。

春や心を。さそふらん。

夜討曾我

さるほどに。兄弟  
これは祐成が。  
文字消えて。薄くとも。  
皆人の。かたみには。  
水莖の。あこをば。  
老少不定と。聞く時は。  
老いたるも。残る。世の習。  
おぼしめされよ。  
肌の守りを。取り出だし。  
形見に御らん。候へ。

作者 未詳

文こまなく。書きをさめ。  
今はの時に。書く文の。  
形見に御覽。さふらへ。  
手跡に勝る。物あらど。  
心にかけて。とひ給へ。  
若き命も。たのまれず。  
飛花落葉の。ことわりと。  
そのとき。時致も。  
是は時宗が。  
形見は人の。亡き跡の。



思ひの種と申せども。  
 時致は。母上に。  
 今までは。其主を。  
 此世の。縁ふくこ。  
 既に此日も。入相の。  
 諸行無常と。告げわたる。  
 涙を文に。巻きこめて。  
 詠せし人の。心まで。  
 かゝるや富士の。裾野より。  
 すごしと跡を。見送りて。

俊寛

時を感じては。

せめて慰む。習ふれば。  
 そひ申したる。思召せ。  
 守り佛の。觀世音。  
 來世をば助け。給へや。  
 鐘もはや。こゑに。  
 さらばよ急げ。急げ使。  
 其儘やる文の。干ぬ間に。  
 今更にもひ。白雲の。  
 曾我に歸れば。兄弟。  
 泣きて留まる。あはれさよ。

作者 不詳

花も涙を。そよぎ。

別れを。恨みては。  
 もとよりも。此島は。  
 鬼ある。ごころにて。  
 たごひ如何なる。鬼ふりこ。  
 天地を動かし。  
 人のあはれ。ふるものを。  
 亡くは我を。ごふやらん。  
 先に讀みたる。巻物を。  
 くりかへし。くりかへし。  
 成經。康頼と。  
 もしも禮紙にや。あるらんと。  
 僧都とも。俊寛とも。

鳥も心を。動かせり。  
 鬼界が島と。聞くふれば。  
 今生よりの。冥途あり。  
 此あはれふごか。知らざらん。  
 鬼神も感を。なすふるも。  
 此島の。鳥けだものも。  
 せめて思ひの。餘りにや。  
 又ひきひらき。同し跡を。  
 見れども。見れどもたゞ。  
 書きたる其名。ばかりあり。  
 巻き返して。見れども。  
 書ける文字は。更になし。



こは夢か。扱も夢ふらは。  
俊寛が。ありさまを。

さめよくと。うつふき。  
見るこそあはれ。なりけれ。

(十五) 新議案

籠の鳥

大和田 建 樹

(一)有明月の。かけきえて。

窓はやうく。白みゆく。

(以下皆同作)

草のまくらを。おきはふれ。

空にうたはん。時はいま。

いさむ翼を。いかにせん。

雲にいるべき。みちたえぬ。

(二)朝日はいまも。ふるさとの。

野邊より野邊を。いろどりて。

すみれの露に。にほふらん。

友の羽がひを。てらすらん。

ながめはてなき。天の原。

神のあたへし。庭ふるを。

(三)聲もとめぬ。我戀ひて。

まよふか母は。草かけに。

戀しやふれし。水の音。

あはれ夢みぬ。さきふらは。



歌ひし外に。おぼえなき。

囚のわが身。いつまでぞ。

(四)あれにぞみゆる。窓ごしに。

野寺の塔の。くもかすみ。

いまはおよばぬ。よその空。

うらやましきは。春の風。

あはれ慈悲ある。少女子よ。

親子の情は。われのみか。

霞む夕日

(一)霞む夕日に。おくられて。

花の雪ふむ。岡のみち。

た、かむ影は。消えぬとも。

なほ奥ふかく。わけ入らん。

(二)菜種につづく。山寺の。

森よりひびく。鐘のこゑ。

雲雀を床に。いそがせて。

歌思ふ身に。志みわたる。

(三)野末はうすく。暮れそめて。

土筆つむ子も。歸るふり。

あすも又來ん。あふ戀し。



花よ胡蝶よ。春風よ。

夏の風

(一) 神杉の梢を染めて。  
今ぞ時。いざや遊ばん。  
みたらしも。我ゆくかたに。

夕日影のころもしばし。  
今ぞ時。いざやすままん。  
聲たてゝ。愛をぞかはす。  
共にあそばん。

(二) 星ひとりに。光涼しき。  
虫かごに。草つみ入れて。  
その髪を。我こそ撫づれ。

なそがれの。宿をも訪はん。  
子もつどへ。少女もつどへ。  
その袖を。我こそ扇げ。  
共にむつびて。

(三) 岩井こす。水ねご更けて。  
窓の戸を。いくめぐりして。  
あはれわが。世も夢ふりふ。

人の世の。夢しづかあり。  
月の霜。ふむもいくたび。  
薄だに。われを宿さぬ。  
晝もありしを。

(四) 露ふがら。眉うちあけて。  
蓮葉は。裏もへだてず。  
こゝちよの。朝ぼらけかな。

白百合は。我にぞふびく。  
我みちに。起き臥しすなり。  
極樂は。我心から。  
おぞや世の人。

(五) 天きらふ。雪かあられか。

瀧つせの。波かしぶきか。



こゝに我。生れしあした。  
柴人の。たきゝに乗りて。

まだ知らず。怒る日かけを。  
谷幾重。こえんとすれば。

松ぞともふふ。

(六)うすぎぬに。身を包ませて。  
襲ひくる。暑さも追はん。  
夢さめば。母にかはりて。

枕する。乳兒よく寐よ。  
よる虫も。我ぞ拂はん。  
風車。我ぞまはさん。

おもしろし世は。

(七)むかへねど。玉のうてなに。  
まねかねど。しづの軒端に。  
ふでしこの。咲く山かけを。

あそぶふり。夜晝わかず。  
ふるゝふり。朝夕さらず。  
我宿と。思へば露も。

あひ宿りして。

あられ

(一)芝生におちて。走り舞ふ。  
ふれく白く。つもるまで。

いきほひたけき。玉霰。  
あなはや色は。きえうせぬ。

すぎ志名譽の。花に似て。

(二)たゞよひうかぶ。いけ水の。  
志ばしごまりて。ふほ遊べ。

落葉にをどる。玉あられ。  
あふはや波に。きえうせぬ。

さだめなき世の。様に似て。

(三)おぼろ月夜に。散る花の。

すがたをみせて。ふる霰。



拾ひ集めて。おくらんご。

うくる袂に。消えうせぬ。

戀しき人の。影に似て。

(四)空にな、かひ。地にさけび。

まるびくだけで。ふる霰。

勝つも負くるも。隔ふく。

同じ枕に。きえうせぬ。

わかき心の。慾に似て。

(五)松葉がくれを。命にて。

わづかにのこる。玉あられ。

くだりしをりの。関の聲。

いつこの胸に。眠るらん。

童あそびの。夢に似て。

夕 雲

(一)くちなしの。

裾うちかけて。山の端に。

しばし休らふ。黄昏は。

浮世の戀の。おもひげを。

あつめてゑがく。わが姿。

(二)獅子と舞ひ。

龍とおきふし。神のゆく。

橋わたし、も。わがエみ。

あらしのあごの。青空に。

かゝる命の。おもしろさ。



(三) 足もとの。

山をふかばの。うす紅葉。

かたみにおきて。いざいふん。

わが故郷は。霧のおく。

鹿の音とほく。響くかた。

沖と磯

(一) 磯の山しろく。月は出でぬ。

けふもはや名残。釣を止めん。

蘆火たく影の。とほく動く。

戀しわが妻は。松のあふた。

得物かす見えて。舟にをどる。

これぞ我いのち。いざや家に。

(二) 沖の色くれて。夜風さむし。

あはれ待つ人の。舟はいづこ。

空か海原か。はても見えす。

心ほそ君が。日々のゆくへ。

馴れし艚の音の。あれに聞ゆ。

いまぞ我胸の。波はよそに。

月と我と

(一) さしひく汐は。鼓のしらべ。

岩こす波は。太鼓のひびき。



晝見し濱路は。せまくふりて。

たゞ二人。月とわれど。

(二) 島かけ黒し。波路のすゑに。

月のみ白し。汐路のをちに。

晝見し釣舟。いまは失せて。

たゞ波と。月とわれど。

閻 龍

(一) かぎりも知られぬ。海原に。

あらふみに。

命を捨てたる。丈夫の旅路。

あらしよはやてよ。吹かば吹け。

(二) 日影もくもりて。波高し。

風あらし。

舟子の怒は。雷とぞひしく。

丈夫の望みを。何とせん。

(三) 雲路につゞける。波間より。

海路より。

陸こそ見えなれ。いさめや舟子。

あれ見よ黒きは。陸ぞ陸。



なごりをし

(一)花白くわすみて。暮れわたる山里。

ふごりをし見捨て。かへるころ。

春風ふきおくれ。里まで麓まで。

(二)かへりみる梢に。月もはやのぼりぬ。

いざやいざ春風。ふれもころに。

わが歌をはりなば。打ちつれ又ゆかん。

新體詩學終

明治廿六年二月十五日印刷出版

正價金拾五錢

編輯兼  
發行者

大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

印刷者

近藤圭造

麹町區飯田町五丁目廿六番地



發兌書林

博

文

館

東京日本橋區本町三丁目



